

『お父ちゃんは馬鹿ねえ?』と言つて苦しうに笑つた。

眼は何を見ても心を痛ましめるやうな、心は何を見るにつけても氣を焦立せるやな男の胸には、子供の言つたことすら許す程の餘裕がなかつた。父親はこの子供の言つた言葉を聞き付けると、

『馬鹿だ? 親に向つて馬鹿つて言ふことがあるかッ!』と怒鳴つて拳を固めて、少女を打ち据ゑる身構ひをして二歩三步迫り寄つた。おとめはこの權幕を見ると身を竦めて、恐怖の爲めに大きな聲を上げて泣き叫んだ。

『ご免なさい……ご免なさい……ご免なさい……』

けれども父親は尙ほ拳を固めて眼を怒らして、其處に突立つたまゝ自分の子供の泣き叫ぶ有様を見詰めてゐたが、心では他のことを考へてゐた。何等の抵抗力のない弱い者に對して、かうしてそれよりはずつと強い自分が迫害を加へつゝあることを、淺ましくも野獸の如くにも思つた。けれども子供も同じ動物とし

て見た時、恐怖に襲はれてゐる子供の姿を醜くもまたいぢらしくも思つたのであつた。……しかしなんで自分はこんなに苦しい心の經驗をせなければならぬのかと考へた刹那に、常に心の裏面にあつて無意識の裏に自分の思想を暗くするものは、この社會が勞力に對して甚だ不公平な報酬を拂ふため常に抱かなければならぬ生活の不安であつたことを感じたのであつた。

母親は自分の體にしみが付いた、何も辨へてゐる筈のない子供が怖れのために戦く有様を見て平氣であることが出来なかつた。彼女は自分の前に突立つた夫を見て、曾て見覚えもない敵の如く惡魔の如く罵りたかつた。けれど明かに自分の身の上に来るべき打擲の危害を知つたゝめに、恐れて思つたことも言はず僅かに聲を戦はしながら、

『こんな子供に何の罪があるんですか?』と言つて白眼で男を見上げて反抗したのである。

家の裏はうす暗くなつて、寂然としてゐた。こんな夫婦喧嘩は度々あつた。而して男は二言目には其の拳で妻を擲るやうな習慣になつた。人を擲るといふことが後で不快を感じるものであるといふことを知らぬのでなかつた。また或時は急に氣を換へてごつかりと其處に坐つた。而して意地悪く、急に落付き拂つた様子をして、

『どうだお前は田舎に歸つてくれないか？　かう生活が苦しくてはとてもやつて行かない。』と言つたのであつた。

男はこの方が擲るよりは女にとつて効果のある侮辱であると思つたからだ。しかし彼は眞に心にかうした考へがないのではなかつた。たゞ單に生活の苦しむために夫婦が別れるといふことはあまりに不合理のやうに思はれたのであつた。其時妻は何時でも歸れと言ふなら田舎へなりと何處へなりと勝手に出て行くから、私の失した着物を返してくれい。また現に質屋に入れてある品物を出

してくれいと言ふのが習ひであつた。さもなければ今直に立つから旅費を出してくれいと言つた。男には女の言ふことの筋道の立たないことは分つてゐる。其の感情も分つてゐる。たゞ男には餘分の金といふものが少しもなかつたのであつた。

こんなことで生活難から二人の喧嘩はたび／＼繰り返へされた。いつか此の長屋の人々から、あの家ではよく喧嘩すると噂されるやうになつた。かうなつてから女は益々神経が過敏になつた。而して男に向つて『近所では笑つてゐる。また喧嘩をすると言つて笑つてゐる。もうこんな場所には住んでゐられない。いつそ死んでしまつた方がいゝ。』と言ふやうなことがあつた。男は女がさう言ふと嘲笑つた。男には心からさう思はれたのである。自分等は生活難の上から眞面目に考へて、言ひ争つてゐるのだ。其れを世間の者共が笑ふ理由がない。世間の者共にだつて少し眞面目になつて考へて見る氣があつたら、みんな己等の

やうに行き詰つてゐるやうな苦しみが分るだらう……かう考へると却つて大きな聲を出して世間に聞えるやうに怒鳴つたのであつた。

『笑ふ奴等には勝手に笑はせてやれ。笑ふ奴等がどんな暮らしをしてゐるかい。』と言つた。而して二人は、全く暗くなつて寒い晩にランプを点けずに、また夕飯の支度もせずいつまでも言ひ争つてゐた。おとめはこの有様を見ると、たゞ子供心にも悲しくなつて来て泣きつゞけたのであつた。

三

384

男は若い時分に故郷を出た。月日は煙の空に消え行くやうに經つてしまつていつしか三十の年を越えてしまつた。其頃から生活は益々苦しくなつて今迄のやうに美しい空想に耽らなくなつた。而して未來に何等か楽しい月日が自分を待ち受けてゐるといふやうな憧れが消えてしまつた。たゞいつまでも灰色な

ひ 思

385

かな淋しい世界が窮りもなく、さながら眼前に幕を張りめぐらしたやうに擴がつてゐるといふ氣持にしかたなくなつた。

彼は時々茫然として自分の未來といふものを考へた。而してかうして自分が一日働いて日を送つてゐることがたゞこれから後にも數限りなくつゞくだけのことだといふやうに考へた。たゞ其の長い間には自分が病氣をする……妻が病氣をする……子供が大きくなつて學校へ行く……而して益々生活が困難になつて行くばかりだといふことだけしか考へられなかつた。たとへば明日は何か異つた面白い經驗に打ち當らないかといふやうな希望を抱いて今日を送ると、其の明る日がやはり無興味な灰色の日となつてあらはれて来て、やはり自分は不安を抱きながら、昨日と同じやうな生活をくり返すまでのことだ。而して未來の果にはたゞ冷かな仄白い霧に包まれた寂寞とした世界があるといふことが意識せられる。死！ がそれである。死は生物の脱れない運命である。この事實を

ひ 思

打ち消すやうな愉快な事件は今の自分の身の上では想像が出来なくなつた。今男は雨に濡れた柳の枝をくゞりながら濠端を歩いて考へ込んだ。彼方には自分の行く工場の煉瓦造りの建物が雨の中に赤く爛れてゐるやうに見えた。黒すんだ濠の水を越えて彼方には町々の屋根が薺々と立ち並んでゐて、鱗のやうに雨に濡れて瓦が光つてゐた。柳の木の下には屋臺店があつた。また濠の中には船が黙つて蟲の這つてゐるやうに動いてゐた。何處からともなしに悲しさうな小さな音色に混つてまた別なそれよりは幾分か大きな楽しさうな音色が雨の中を漂つて來た。其時一臺の自動車が來た。彼は慌て道を開くと自動車は泥水を刎ね飛ばして傍を過ぎた。獸の吼えるやうな鳴音と、青いアセチリン瓦斯の煙と臭氣とが、過ぎ去つた後に遺つてゐて、これを嗅いだ彼は痛みを感じてゐた頭に一種の破調子なインスピレーションを起した。それは労働者の富豪に對する反抗といふやうな問題についてであつた。反抗すべきが當然であるといふ

やうな感情であつた。この眼前に横はつてゐる都會には人間の楽しまんがために設けられたるものが幾何あるか分らない。獨り富豪のためにのみ設けられて他の人々は其の樂しみを受ける権利はないといふやうなものは一つもない筈であるしかるに世の中の文明は獨り富豪のために益しつゝあるばかりであつた。

あの濠の彼方の岸の赤い巾のかゝつてある二階屋は料理屋である。其處には美しい着物を被た愛嬌を振り撒く藝者がゐる。其の女は誰のために愛嬌を賣つて慰藉を與へやうとするであらう……あんな自動車が出来たからとて、其れに乗つて其れを使用するものはどんな人であらう。この都會に住む幾百萬の労働者の中に果して一人でもあり得やうか……而して貧しいものは何うしたら金を取るやうになることが出来るだらう……かうして一日も身を休める暇もなく一生働いて、少しの餘裕も出來ず、従つて何の面白いこともせず死んでしまふとしたら、自分は何のために此の世界に生れて來たのだらう……獨り太陽の光

りは地球の上を普遍に照らしてゐるものを自分等は甚だ異なつた生活を送りつ
つある。この世界の文明とか、法律とか、公園とか、料理店とかいふやうなも
のは自分等のやうな人間には関係がないのであらうか。而してなせ自分等は彼
等のやうな境遇に生れて來なかつたか？ 然りたゞ境遇が異なるばかりだ。同
じい人間に生れて來てゐながらこんな苦しい目させなければならぬのだ。多く
勞働して少しの賃金しか得られずに家庭の貧苦に泣くものと、何もせずに遊ん
でゐて面白く樂に暮らして行けるものと、どういふ甚だしい矛盾であらう。而
してこんな矛盾したことが人間の黙つてゐるべき眞理とせなければならぬのは
何ういふ譯であらう自分は多くの人々が社會を正當として通つて行くのを見る
と、此の社會にはまだ眞の掟といふものがないのだと思ふ。まだ眞の掟のない
社會なら新しい掟を見出さなければならぬやうな氣がするが、法律といふもの
があつて、この氣味の悪い沈黙を出来るだけ長く守らしてゐる。沈黙を守らせ

るためには矛盾したものでもそれを保護してゐるのである。最初に於て最も眞
理を實現した世界は次第に墮落してこんな状態でだん／＼年を老つて行くので
ある。

彼はこんなことを思ひながら暫らく雨の中に立止つて自分の行かうとしてゐ
る工場を眺めてゐた。秋の雨は女の泣くやうにしと／＼と降つてゐる。而して
心なく柳の細い枝から雨の雫が滴つてゐる。彼は泥濘を歩きながらこんなやう
に自分は尙ほ幾年歩いて此の工場に通はなければならぬのだらうと思つた。彼
は傘を外れて雨が着物にかゝつたので袂の尖がしつぽりとなつて黒くなつてゐ
るのにも氣が付かなかつた。

工場の煤けた窓からくゞり込んで來る鼠色の光線は寒く壁の上に落ちた。窓
の下で一生懸命に働いてゐる時は彼には全く遠い空想の世界に思ひを驅ける餘
裕もなく、たゞ午後となつて家に歸る時刻になればよいと思つた。而して此の

工場の門を出れば自分の躰が自由になるのだとそればかり考へてゐた。やがて天來の福音のやうに歸る時刻の鐘が鳴り渡ると、多くの疲れた職工の顔には喜びの色が動いた。而して一團の群は急いで先を争つて工場の鐵門を出た。其時彼は自分を追ひ越して笑ひ、叫び、罵りながら行く多くの人々を見遣つて、どんな楽しみが彼等にあつて、かうして急いで喜んで家に歸るのだらうかと考へた。

工場にゐる間は彼も早く歸る時刻が來ればいゝと思つてゐたが、一たび鐵門を出て自由の躰となつた時に自分の行くべき處はなかつた。たゞ自分の暗い寒い家に歸つて行くより他に途はなかつたのである。家には妻と子供が待つてゐる。妻は貧に窶れて身形もかまはずに、たゞ自分の顔を見れば愚癡を言ふばかりである。さながら苦しみを自分が與へてゐるやうに思つてゐる。社會の罪だといふやうなことは少しも考へてゐない。家に歸つて何が面白いことがあらう

……此頃は子供までが人の顔色を讀まんとするやうになつた。このことばりは誰の罪でもない。子供が始めからかうなる理由はないのだ。みんな自分等二人が意氣地がないから子供にまでこんな憂き目を見させなければならぬ。しかし自分は決して怠けてゐるのでない。全くこれよりどうすることも出来ないのだ。

彼はこんなことを考へると家に歸つてまた妻や子供の顔を見るのも厭になつた。職工はみんな行き盡して、途の上にたゞ獨り自分が遺された。彼は振り返つて赤い煉瓦造の工場の建物を仰いだ。雨は名残なく晴れて、夕日のうす光りが建物の片側に當つて、赤い煉瓦の壁は金粉を混じたやうに底に輝きを放つてゐた。雲のある空が破れて冷たい青い海のやうな色が露み出てゐた。……もう自分等の働いてゐた室の裏には誰も残つてゐるものはなからう……室の裏は火の消えたやうに寂然としてゐて、鋼のやうな空氣が占領してゐるばかりだ。

職工等のやりかけて止めて来た仕事は其儘になつてゐて道具が冷たく黙つて床板の上に轉がつてゐるのが眼に見えるやうだ。彼は家に歸らずに此の儘道を戻つて獨り工場の中に残つてゐたいやうな氣がした。而して飽迄淋しみを獨りでしみぐと味はつて見たいやうな氣持がした。

今かうして獨り思ひに惱んでゐる胸のうちの心持に較べればやはり工場で多くの友達と共に夢中で働いてゐる時分が最も楽しいやうな氣持がした。家に歸つて妻の話を聞くよりはまだ友達等の話が面白い。彼等も家に歸つたらごんな風に暮らしてゐるか分らないけれど、兎に角工場で働いてゐる時には其の話には活氣がある。不平がある。而してまだ何かこれから先き大きな事件でも惹き起し兼ねないやうな豪さうなこと言つてゐる。たとへそれが言葉の端ばかりのことであつてもいゝ、あゝいふ空氣の裏にゐると、くよくよとしたことを考へずにゐられるだけ心地いゝやうな氣持がしたのである。

男は家に歸つてから夕飯が済むと暗い室の片隅の方に横になつた。而してやはり其日の歸りに考へてゐたことを考へつゞけて見た。……月に働いて取る金が幾何……一年に取る金が幾何……十年に取る金が幾何……自分の一生に取る金が幾何……と彼は胸のうちで計算をして見た。彼が一生働いて取る金も凡そ其の額が知れてゐるのだ。而して其の長い十年間かゝつて働いた總ての金額も彼の富豪等が狭斜の巷で歡樂のために少しも惜まずに捨てる二日か三日間の金額にしか當つてゐなかつた。

彼は此時眼を閉ぢて自分は何のために此の世に生れて来たかといふことを考へて見た。思ひ出せば決して短くなかつた過去の歩いて来た道が眼の前に見える……まだ結婚もせずに獨身でゐた頃にはよく芝居にも行けば、女を買つたこともあつた。而して結婚した時には幾何の金すら貯蓄もしてゐたのである。それが始めて子供の産れた時に其の貯金はすっかり出してしまつた。其の

後妻が長らく病氣をした時に二人の着物は悉く質屋に入れて流してしまつた。其後自分が病氣にかゝつた時に残つてゐた品物のうちで金になるものは大抵拂つてしまつた上に、諸所の方面に負債が出来て、其れからといふものは日にまし生活が困難になつて來た。まだ此後も負債は積つて行くばかりで、益々重い生活の苦しみに身が壓せられて行くやうな氣がする。たゞ運命を呪ひ、運命を怖れる以外に他の考へが出なくなつた。今になつて考へて見るといつまでも自分は結婚をせずにあの儘獨身者であつたら、まだ知らなかつた面白い經驗が出来たやうに思はれる。……

かう考へると彼は後悔したのであつた。今更過ぎて來た道をどうすることも出来ないど知りながら、誰にか向つてこの不平を訴へ自からを罵らなければ氣が濟まなかつた。

『あゝつまらない……いくら己が働いたつて何になるもんだ。お前は子供

を連れて田舎に歸らないか。』と男は傍らに坐つてゐる妻に向つて火蓋を切つて見るより他に反抗する人がなかつた。而して妻が自分の仇敵でゝもあるやうに妻を苦しませた。

女はまたこんな場合には始めのうちこそ眼に涙をたへて黙つて、下を向いてゐたけれど、いつしか反抗して來て終ひには負けてはゐなかつた。

『手足纏ひになる子供なんか誰が伴れて行くもんだ。出て行けと言ふなら、今直にも出て行きますから子供はあなたが引き取つて下さい。』と女は泣きながら叫んだ。

おどめは兩親の言ひ争ふのを暗い顔付で心配さうに見守つてゐた。この子供の生れた時、母親の乳が不足であつたためにまだ一年経つか経たないうちに乳離れをさして後はおも湯で育て、來たので、大きくなつても胃腸が悪かつた。母親に似て青白い顔をしてゐた。一つは營養の不足もあつたのである。おどめ

は母親が泣きながら田舎に自分を置いて歸へると父親に向つて言つてゐるのを聞くと、急に悲しくなつて、

『お母さん……妾もいつしよに連れて行つて……』と言つて母親に縋り付いた。母親は父親の面當に何も辨へてゐない子供を手荒く父親の方に突き退けた。

『誰がこんな手足纏ひになるものを連れて行くもんか……』と毒々しく罵つた。

女の子供に對するこの残酷な仕打ちを見ると男は赫として黙つてゐなかつた。

『この兒に何の罪がある。薄情な阿魔めが……』と跳りかゝつて女を其處に蹴倒した。擲つた。忽ち女の泣き叫ぶ聲、子供の泣き叫ぶ聲が寂寥を破つて家中で大事件の起つたやうに四邊の靜かな夜に響き渡つた。長屋では戸を開ける音がした。而して暗い路次を拔足をして此の家の前に集つて來て立聞きしてゐ

る氣はひがした。……喧嘩の濟んだ後男はいつも淋しい顔をして、腕組をして黙つて坐つたまゝ、暗い家の裏を見廻すのであつた。破れた障子、灰色の壁、火の消えた火鉢、其處に食ひ散らされたまゝ、隅に押しやられた膳などを見詰めて、心が全く暗くなつて、死の生よりも樂であるといふことなどを深く考へ込んだ。男は暫くして顔を上げて、まだ泣きつゞけてゐるだらしない妻の様子を見たり、怖えながら、眼から涙を流して凝と自分の顔を見守つてゐる子供を見ると、厭氣よりも寧ろ人生の此の如き事實に對して戰慄を感じた。而していつそ家を飛び出して此儘何處へか姿を隠してしまはうかといふやうな考へも起つた。

男も女も時々自分の生れた故郷を思ひ出した。二人は各自の生れた家のことや村の有様などを語り合つたことがあつた。しかし男には女の故郷を見もしまなかりもしなかつたから、女から聞いたからとて格別興味のある譯でなかつた。それと同じく女もやはり男の故郷を知らなかつたから、男からそれを聞い

ても別に面白いとは思つてゐなかつた。

たゞ二人は自分で心に思ふことを相手に言つて聞かせて、自分獨りでその追懐を楽しんでゐるのであつた。しかし女を男の少年時代の有様を聞くことを好んだのは、現在の男が自分のものであるばかりでなく子供の時分の男がやはり自分のものであつたといふやうな氣持がした一種の誇りである。だから男が子供の時分の話をする時には女は熱心に耳を傾けた。男もやはり同じい意味で女の子の時分の話を聞くのが面白かつたけれど、また時には過ぎ去つてしまつたことを聞いたからとてそれが何になるであらうといふやうな、寧ろ苦勞を知らなかつた時分の少女の姿が一種の呪はしいやうな嫉ましいやうな氣分を誘つたために男は中途から『もう止せ』と言つて女の話のを遮つたこともあつた。

しかし或時は二人は互にのんびりとした氣持になつて自分等の故郷の景色を

夢見るやうな顔付で語り合つたこともある。男は、

『己の家は村の端であつた。前の圃に柿の木があつて、秋になつて霜が降ると實が赤くなつたものだ。今でもあのひよろ／＼とした柿の木はあるだらう……』と言つた。

しかし男も、女も、とつくに自分等の歸る家を持つてゐなかつた。たゞ女だけはまだ故郷に子供の時分可愛がつてくれた叔母が住んでゐると言つた。而して叔母が達者であるうちはいつ歸つても可愛がつてくれるだらうと言つてゐた。

男は故郷を思ひ出すのさへ厭な氣持がしたことがある。而して『己にはもう故郷といふものがないのだ』と自分に言つて見て、深い哀愁に沈む時があつた。また黙つて考へ込んでゐたが、顔を上げると眞面目に妻に向つて『お前は故郷に叔母さんがあるのだから……今の若いうちに歸つたらどうだ……己はお前に食

ふだけの金を送つてやるから……』と言つたことがあつた。
 しかし二人はこんなことを口に出して言つたものゝ、未だ互に實行するだけの勇氣もなければ、全く心からは其の氣にもなれないところがあつた。たゞ男が妻と喧嘩をする時には『田舎に歸つてしまへ！』と言ふのがいつか口癖となつたばかりである。

ある日男は、少し體が悪くて工場を休んだ。もう戸外の秋も老けてしまつた。午後になると三人は一室に坐つて珍らしく睦しく語り合つた。焼芋の皮を剥いて食べながら澁茶を啜つて、男と女は故郷の話をした。男は自分の隣にも自分と同じ年頃の子供がゐたことを物語つた。女は青い青い海の話をした。而してあの濱では今頃鱒の取れる時分だなどと言つてゐた。獨り二人の間で都會に産れたおとめは山も知らなければ海も知らなかつた。たゞ兩親の話を聞いてゐて、覺束なげに空想をめぐらしながら、其のまだ見ない田舎が頻りに戀しくなつた。

是れ迄も父親が母親に向つて、『田舎に歸れ』と言つたゝびにおとめは小さな胸の中にいろ／＼と遠い田舎の景色はどんなものであらうと考へられたのであつた。而して何となく淋しい悲しい處のやうに思はれたうちにも何となく戀しい懐しい處があつた。此時おとめは、

『お母さん來年の春になつたら……田舎に歸りませうねえ』と憧がれの瞳を輝かして母親の顔を見守つた。

母親はたゞ『あゝ……』と言つて淋しく笑つたばかりだ。而してなほも父親と自分の子供の時分の話をつゞけてゐた。おとめは、

『お母さんの田舎つてや何方……』と母親の脛に寄り添つて聞いたのであつた。
 『ずつと彼方の……遠い國だ。』と父親は珍らしくしんみりとした言葉附きで、子供の頭を撫でながら語つて聞かせた。而して此時はいつもに似ず柔しい心持を語るうるほひを含んだ眼で子供の顔を見守つた。而していろ／＼の空想に耽

り遠くに憧がれてゐる子供の輝く瞳の中を覗き込んだ。此時男の心には何となく無邪氣な子供の心を哀れむの情が動くと共に、いつしか知らず思ひは遠くに移つて、自分の故郷を懐しんでゐたのであつた。

秋の日は慌しく暮れかゝつた。西向きの小窓の障子が紅く染つて見えた。常に都會の中に起つてゐる物言が、ひとしきり晴れ渡つた夕暮方の空にはつきりと歌つてゐるやうに聞えて來た。男はいつの間にかもとの暗い顔付となつて窓の方を見てゐたが、

『明日もお天氣だ』と力なく言つて起ち上つた。男は窓際に來て障子を開けた。直ぐ裏手には黒くなつて破れた垣根があつて其れを越えて他の家があつた。何處を見ても眼を遮るものは高い、低い瓦屋根ばかりであつた。其の中のある屋根と屋根との僅かばかりの間から紅い入日の雲が見えたのであつた。男はこんな真紅な夕焼を見ると胸が躍つた。其れは故郷の廣い野原を思ひ出したからで

あつた。たゞ此處では混み合つてゐる屋根が邪魔をして思ふやうに遙かの地平線に沈む夕日を見ることが出来なかつた。男は自由な子供の時分に遊んだ故郷の廣い野原を考へると、眼のとゞく限り遠い地平線に沈む入日が見たくなつた。彼の心には子供の時分の感情が微かに遠い世界から呼び返へされるのを感じた。遂に昵としてゐられなくなつた彼は家の裏から飛び出した。

『窓から見れ。いゝ夕焼だから……』と彼は家を出る時妻や子供を振り向いて言つた。こんなに訝えくした聲で物を言つたことは彼が數年來になかつたことだ。

彼は全く此の刹那、子供の時分の感情に返つたのであつた。男の出した後で、妻も子供もみんな窓の所に來て立つて西の夕空を眺めた。

男は家を飛び出すと町の中を其處此處となく走り廻つて何處か家と家の間から地平線の見える處がないかと探し歩いたけれど、屋根の上にも屋根が重り合

つてゐて地平線に沈む入日が見えるやうな場所がなかつた。男は何處に立つて見ても僅かに電信柱の上の空が紅くなつて、其の下には黒い屋根が重なつてゐるのであつた。

ひ 思

此時彼方の高い西洋造りの二階の硝子窓に遠く紅い潮が押し寄せて來たやうに色づいた光線が残つてゐた。彼は茫然として道の上に立止つて暫らく其の建物を仰いでゐた。而して其の高い西洋造りの建物に住んでゐてこの紅い入日を見得る人の境遇を幸福だと考へた。此時ばかりは町の中を往來してゐる騒がしい人の叫めき聲や、いろ／＼な物音が彼の耳に入らなかつた。彼はよくこの建物の中からピアノの音が聞えて來ることがあるのを思つた。而して彼の心は尙ほ何處か此の近傍に入日のよく見える場所がないかと焦立つたのである。……彼は町端れの病院の前に行つたならば、きつと入日がよく見えるだらうと思つた。彼は其處へ走つて行つたけれどもやはりいろ／＼の都會の建物が眼界を遮

つて地平線に沈む入日を見ることが出来なかつた。

彼は悄然として家に歸つて來た。其の顔は昨日の如く暗く物憂く鬱いでゐた。其の胸には入日のよく見える故郷の廣々とした自由な野原がしみ／＼と戀しく思はれた。

やがて彼は暗い家に入ると、窓の處に立つてゐた子供が、

『もうあんなに青く空がなつた』と父親の顔を振り向いて空を指しながら言つた。男は黙つて窓際に來て子供と並んで立つて空を仰いだ。青々とした晩秋の空の色は紫水晶のやうに冷たかつた。而してこの青黒い深淵のやうな空の奥底から星が蛇の眼の如く凄く光つてゐた。

二たび都會に沈黙の夜が來た。

暗
夜

—

吉郎は冷かな夜の風に吹かれると急に氣が靜つて全く別な心持となつた。頭は明瞭に善惡の判断が出来て、惡酒にでも酔つたやうに氣を焦立たせた感情の熱りが何處ともなく消えて、後には優しい思ひやりのある人柄となつて残されてゐるのを見出した時に自分ながら心の變化を怖しく思つた。意識を超越した自らの力で押へることの出来ない盲目の感情の發作を後になつて顧みると、恰

かも白刃の上を踏んで来たやうな心持がする。

『よくあの時、氣が狂つて相手を殺さなかつたものだ。』と彼は心のうちで考へると覺えず身を戦かした。

薄い金屬の摺れ合ふ音のやうに、木立は夜風に吹かれて闇の裡で鳴つた。吉郎は血の氣の失せた頬を此外界の荒々しい空氣に晒して道の上に立止つて頭の上の木枝を眺めた。黒い天蓋のやうに空間に擴がつた常盤木の枝は一種の暗い怖しい影のやうに空虚の胸に射し込んで心臓の上を押へた。彼はどんな形をしてゐるかこの刹那の感じを、もう一度考へて見やうと思ひ返した時には、たゞ曾て繪畫の書物で見たベックリンの描いた死の鳥の木立を眼に思ひ浮べたまゝである。しかしこの遠い處を探して来たやうな比喻は心に満足を與へなかつた。こんな風に時々神秘は自己の姿を人間の眼に見せるけれど、人間は其の姿を見て捕へやうと意識する時にはもう其の姿は消えてゐる。而して人間は其れを

言ひ表はす言葉を知らない。僅かに乏しい智識を探ねて、極めて似付かない比喻を擧げて其の氣持を解釋しやうとする。吉郎は暫らく闇を透して木立の黒い影を見詰めてゐた。自然は人間の行動と無關係である。自分が今どんな心を抱いて歩いてゐるかといふことについて、何等關係しやうとしてゐないことを知つた。

彼は今頃ランプの下に火影をうけてうす黄色な顔をしてゐる妻の姿を思ひ浮べた。自分が罵つて出て来た後で妻と自分との關係を考へて見た。二人の間にはやはりこの木立に對すると同じい相解することの出来ない差別がある。二人は決して同身でない二つの別々な動物である。然るに自分が暴威を逞うして妻を罵り、飽迄自分の犠牲にしてしまはうとしてゐる其の行爲を顧ると淺ましくも思はれた。ちやうど吉郎は淋しい暗い自分の心持をも知らずに、空しく風に吼えてゐる木立があるやうに、今夜ランプの下で悲しい、怨めしい思ひを訴へ

る人もなく、獨り心に悶えて坐つてゐる妻のあることを考へもせずには自分全
く自分のために何等かの興味を求めて歩いてゐるといふことが分つた。

夜 暗

二

其日吉郎はたゞ淋しく、腹立しく、また堪らない程悲しい氣持を経験したの
である。これといふ程の原因もなしにこんな氣持になるといふことは、極めて
神経質な少しのことにも鋭く感じ易い彼には是迄もたび／＼あつたことである
が、そんな時分には全くなんで此世に生きてゐるのだらうといふやうな味氣な
い心持になつた。而して灰色の壁に向つて眼を閉じながら、靜かに思ひを廻ら
して希望の緒口を探ねて見たけれど、疲れた鬱いだ心に飛び立つやうな感興を
與へるものもなければ、勇氣を振ひ起して大膽に進めと命するやうな前途に輝
く目的もなかつた。彼は時々茫然として其の人の一生を支配する目に見えぬ力

である幸運と不運といふことを考へたのである。而して此の果ない沙漠を歩む
に等しいやうな單調な生活を破つて灰色の中に色彩を施し、生命に油を灌ぐと
共に常に缺乏を感じて苦しむ物質的の方面にも満足が出来るやうな幸福の日を
送るためには自から進んで運命を作るやうな——破格な事業をしなくてはなら
ないと思つた。而して僥倖にもそれが成功するのでなければ、どうしても今の
苦しい貧しい境遇から少しでも脱することは來來ないと思つた。世間の精神的
に、また物質的に成功をした人々を見ると、みんなこの生活の習慣を破つて進
んだ人である。其れが思つたやうに行はれて、空想が甘く實現せられたのであ
つた。自分では偶像破壊者であると信じてゐても、まだ習慣に囚はれてゐて、
憶病で其上心からの道徳家である自分にはそんな怖しい all or nothing のやう
なことが出来なかつた。つき纏ふ疫病のやうに兩親や、妻子の顔が念頭に浮ん
で、意氣地なしと言はれても、いつしか心のうちで舊い生活と新しい生活とが

夜 暗

妥協してゐる。それで容易に自から境遇を變へて、思つたり空想したりしてゐるやうな冒険を實行するやうな氣にもなれなかつた。

自分では自からを無自覺な衆愚と別けて考へてゐても、其の實やはり衆愚と歩調を合はしてゐる弱者であつたのだ。而して頭では何と考へてゐても、行ではやはり昨日と同じやうに單調な危けのないやうな途を歩いてゐて、一日を送つてゐた。また明日になつても少しは今日と變りがあらうとも思はれなかつた。自分の一生も分つてゐる！かう考へると心のうちでは何となく慌しさを覺ゆる。而して徒らに腹立しく、また堪らなく悲しくなつて來た。

秋も次第に老けた。四邊の濕つた靜かな午後である。

空は曇つて、障子紙にはうす暗い光線がにじんで、煤けた處がうす黒い斑點となつて見えた。吉郎が物を凝視する時には、視神經の衰弱は、ゆらくと躰が船に坐つてゐて搖れるやうに不思議な幻覺なしには見得られなかつたのであ

る。室の裡に獨りで坐つて、机に向つて茫然として考へ込んでゐると、冬に近づいたといふことが靜かな沈黙の自然を透して感じられた。そればかりでなく刻々に暗くなりつゝあつた、夕暮方の光線を見詰めてゐると一滴づゝ重く、重く胸に溜り行くやうな黒い悲しみを感じたのである。たゞ遠くで鳴らしてゐる豆腐屋のラツパの音色が、この寂寞とした空間を頼りなく泳いで來る。彼は何をしやうとも思はずにしばらく其の頼りなく消えて行く音色に耳を傾けてゐた。其の音は淋しい灰色の野原の方に消えて行くけれど、あの音の聞えて來る方には、曇つた空の下に黒い建物の頭を並べた賑かな町のあることが考へられた。……

やがて日が暮れてランプを點ける時刻になつたけれど、家の裡はうす暗く其の儘となつてゐて音もなかつた。此時妻は長火鉢の前に坐つて、手を額際に當てたまゝ沈んでゐたのである。吉郎は額際に深い皺を寄せて、机の前から起ち上ると共に深い溜息を洩らした。

『あゝこんな家庭なぞ造るんぢやなかつた。』と感慨に堪へられないで叫んだ。この尖つた言葉が妻の耳に響いた時には急に心が暗くなつて不快を感じさせた。けれど妻は死んだものゝやうに押し黙つて俯向いてゐた。吉郎は自分でランプを點して居間に下つてゐる釣金に吊した。全く火の氣の消えた長火鉢には鐵瓶が冷え切つてゐた。室の裡がぼんやりと明るくなると寒げに眠つてゐるやうな光りを此の金屬から反射してゐた。彼は障子にはまつてゐる硝子板を透して外を覗くといつしか鼠色の夕闇が足音を立てずに窓際に忍び寄つてゐるのを見た。

『夕飯の仕度はどうなつてゐるのだ？』と吉郎は、聲を鋭くして妻の前に突立つたまゝ言つた。而して眼を昵と女の頭髮の上に据えてゐると、瞳は一種の憎惡の念に燃えて怪しい輝きを放つてゐる。女は男のかういふ言葉も感情も受けるのは豫期してゐたといはぬばかりに冷かに顔を上げた。

『私は食べたくありませんから、今あなたのだけいたしませう……』と物憂さうに言つて、妻は痛々しい關節をも動かさなければならぬやうに、迷惑さうに躰を起したのであつた。吉郎は齒噛みをしなから女を其處に突き倒さうかと心で思つたが、無理に堪へて、其の代りに冷かな嘲笑を顔に浮べて眺めてゐた。彼はせめても自分は皮肉な復讐をしてゐるつもりでゐた。

もう幾日か妻の氣分が勝れずに、こんな様子で、一家には笑ひ聲一つ洩れずに送られて來た。

『あゝ厭になつた。なんで家庭なんぞ造つたのだらう……』と吉郎は前より一層腹立しく大きな聲で叫んだのである。今度は妻に聞かせるといふよりは自分に聞かせるといふやうな調子であつた。

けれど妻はこれに答へなかつた。常なら『私だつてさう思つてゐます。そんならいつでも離縁いたしませう……』と言ふのが口癖であつたが此時は何も言

はなかつた。彼は心のうちで豫期してゐた言葉が聞かれなかつたので張合が抜けたやうに感じた。而して黙つて立働いてゐる妻の姿を見ると思ひ切り罵つてやりたいと心の騒ぐうちにも多少の憐みが感せられたのであつた。

三

吉郎は黙つてランプの下で自分獨り膳に向つて飯を食べた。妻は彼と共に飯を食べずにやはり黙つて長火鉢の傍に坐つて儼ぎ込んでゐた。吉郎は心のうちで妻が先刻自分は食べたくないと言つた言葉に對してもかうして食べずにゐなければならぬのだらうと思ひながら、自分獨りまづさうに食べてゐた。而してもう自分の食事が終る時分になつて、

『お前も食べないか?』と言つたのであつた。何となく心が淋しかつたので、家庭の空氣を滑かに和げやうとしたのである。

『いゝえ、私は食べたくありません』と、妻は言つた。この氷のやうに冷かな

言葉は彼の温かに燃え始めた心臟を締め付けた。彼には飽迄妻が意地になつてゐるといふことが分つた。妻は急に氣分の勝れない様子を造つた。吉郎の瞳は二たび鋭く光つてこの故意らしい妻の様子も、彼女の刹那の心持も明かに讀み取らうとした。而して、一層激しい反感を惹き起したのであつた。此時彼はかう思つた。家庭を造つても、かうして妻が病氣であつたり、氣が合はなかつたりして不快の日を送るやうなら、一層家庭を破壊して互に自由の體となつた方が好いやうに思はれた。こんなに苦しい、面白くない日を送らなければならぬやうなら始めから家庭といふやうなものは造るのになかつた。

吉郎は膳を傍に押しやつて、黙つてゐる妻に向つて箆筒の抽斗から金を出すやうに命じた。彼は冷たくなつた手で火箸を取り上げて灰を搔いた。其金は妻が其月の経費のために貯へて置いた金であつた。此時二人は互に途上の人のやうに極めて冷膽な感情を意識した。

『己は、外に出て快樂を求めて來るのだ。お前は何も此の事に對して言ひ得る權利がなからう……』と彼は妻の顔を睨んで言ひ迫つた。

『行つてゐらしやいまし』と妻は小聲で僅かに言つて、身を起して筆筒の前に來て坐つた。而して小抽斗を開けて中から香水の箱を出した。其の空箱の中に幾何かの金が紙に包んで入れられてあつた。妻は紙を開きながら、

『幾何上げますのですか?』と急に怨めしさうに言つて彼の顔を見上げた。ランプの光は妻の眼の中に溜つた涙に染んだ。

『三圓ばかり寄來せ』と彼は強いて聲を入れて言つた。しかし其の聲は自分で思つたよりも低く、戰えてゐたのを感じた。而して妻の手から金を奪ふやうに受取つて、袂に入れると、急に悲しくなつたが吉郎は心のうちでこれではならぬと思つて、手荒に障子を開けて玄關に下りた。

418 振り向いて妻の顔を見ると、青白い顔をランプの光がうす黄色く彩つてゐ

419 た。彼は何となく良心に濟まなく思つたので、早く此場を脱れやうとして戸外に走り出た。

四

吉郎は寂しい暗い道を、明るい町のある方へと歩いて行つた。たへず後髪を引かれるやうな暗い思ひが一步毎に遺されたのであつた。家を出た後で妻は火鉢の傍にゐてどんなことを思ひつゞけてゐるであらうかと思つた。やはり膳を出した儘にして火の氣の消えた長火鉢の前に坐つて茫然として考へ込んでゐる姿が浮んだ。吉郎は妻の心持をはかり考へて見るにつけて、自分と彼女とは其の始め何等の關係もない個々の人間であつたといふことを知つた。たとへ今共になつて一つの家に生活をしてゐても、常に二人は別なことを考へてゐるであらう……たとへばこの社會の生活に對して思つてゐることも同じでない。自分に

はもはや希望はないが、彼女にはそんなものがあるかも知れない。自分には、欲しいものもないが彼女には欲しいものがあるかも知れない。而してそんなことを常に思つてゐるかも知れない。而して吉郎は死んで此世を去つて行く時にも決して二人は共に行くのでない。何れか一人は此の世界に止つて尙ほ喜びとしみを經驗して生活をつまみつけて行くのだと考へた。

畢竟人間は常に孤獨である。此の世界に自分と同じ考へを抱いて、自分と同じやうに生活をしてゐるものは一人もない。全く誰しも同じやうに孤獨の生活を送つてゐるのである。このことは獨り妻と自分との關係ばかりでない。親と兒と雖も全く別な生活を送つてゐるのである。かう考へて、今自分が妻を迫害して家を出て來た有様を思ひ浮べると、自分は弱い者を自分の犠牲にしようとしたのであつた。何となく自分は猛惡な野獸のやうに考へられた。自分の心の慾望を追はんために、自分より弱い而して生活を異にしてゐる人間を

壓迫しやうとした行爲は野獸に等しいものでなければならぬと考へられた。『さうだ。人間も野獸も何處に差別があらうぞ。』……と吉郎は口のうちで言つた。而して淋しいやるせない心を抱いて暗い坂を下つて前方に廣い野原を見渡すことの出来る河邊に出たのであつた。

此時都會には、怖しい虎列刺病が流行してゐたのであつた。吉郎は毎日朝刊の新聞と夕刊の新聞とに其の疫病の處々に突發するのを知つて不安を感じてゐた。遙かに見渡すと、曇つた灰色の地平線の彼方には都會のさまざまな建物が眠つてゐる。彼はほのぼのと曇つた空を鈍色に染めてゐる脚光を眺めて、暫らく耳を傾けて路の上に立止つた。

この東の都會に、遠く西の印度支那のあたりから犯して來た惡疫が、眼に見ることは出來ないけれど幾百萬の人々の身の上を襲ひつゝある事を思へば一種の恐怖が其の脚光の反映にも潜んで見える。吉郎は河の流れについて暗いぬか

るみの道を歩いて来た。空模様を仰ぐと雨は今にも落ちて来さうである。土手の上に立ち並んだ、家根の低い二階家の燈火が、雨上りの溢れんばかりに漲つてゐる河水の上に美しく輝いてゐた。暗の底を水は幽かに音を立て悠々と流れて行つた。やがて堰に近づく急激になつて瀧壺に飛沫を上げて凄じく轟き落ちた。瀧壺の底は暗くて分らなかつた。たゞ濕氣を含んだ寒い風が吹き上げてゐる。彼は暫らく枳殻の木蔭に蹲踞つて音を立て流れて来る水の瀧壺に落ちるのを眺めてゐた。一軒の料理屋の前に立つてゐる軒燈の火影は水の流れるに浮んでたへす揺れつゝあつた。さながら赤い糸を引いたやうに火影が水の上に長く漂つてゐた。

濕つた夜の空氣を震はして、其の一軒の料理屋から洩れて来る三味線の音色がある。其の音色は彼の心に淡い悲しみを誘つた。其他其處にあつた二三軒の飲食店にはいづれも若い女がゐて心も肉も荒み果てたやうなだらしない風をし

てゐたのである。

吉郎は自分はなんのためにかうして此處に来たかといふことをしみじみと考へた。決して自分の心は浮いてゐないと思つた。其でなければ三味線の音色を聞いて心が浮き立たなければならぬのに少しも愉快を感じてゐなかつた。寧ろ此の刹那頭の中では家を出る時に罵つて来た妻のことを考へて憐れを催うしたのである。而して自分のした行爲に對して後悔すら感じてゐた。けれど、またたとへさう思つたからとて二たび此儘家に歸らうとは欲しなかつた。吉郎はこの矛盾した心のうちを自から考へたけれど分らなかつた。たゞ窮りない哀愁と焦立しさと一種の苦痛とを感じたばかりである。彼はこの自分にも分らないらしくとした心持を何うすることも出来なかつた。しかし自分の行爲がもとより罪惡とは思はれなかつた。また正當とは思へられなかつた。たゞ家に病み疲れた憐れな妻のあることを思つたのである。また此處に何物かを得て苦痛を忘

れんとしてある矛盾した自分のあることを意識した。彼は第三者の地位に立つて自分の哀れな悶えてある姿を眼の前に眺めることが出来た。吉郎は闇の中に立つて鋭利な自覺と公平な批判力を働かして、自分を誰れ憚るものもなく最も醜惡な人間に解釋しやうと試みた。

頭が不自然に働いて神経は過敏になつて、しかも精神的に疲れ果てゐる彼にとつては、かうして家を出て、淫らな病毒に染んだ女の處へやつて來るのはたゞ肉慾を追うためばかりでない。今現に彼れ自身は何等の肉慾の衝動を感じてないのにも分る。さらば好奇心のために來たのであらうか。……それとも自分の秘密な病的の色情狂的の行爲のためであらうか……自分はまだ色情狂といふものゝ心理状態を知らなかつた。しかしこの廣い世間には、たゞ何等の自覺もなしに動物的の慾情を遂行してゐる野獸のやうな人間が幾何もある。彼等の中には曾て良心の苛責もなく、自覺もなく、精神の覺醒もなく、強健な肉體の要求

から飽くことを知らないまでに盲目の本能に動物的に發達した身軀を委ねてゐるやうな男も女もある。これに比べると自分は少なくとも、そんな卑しむべき無自覺な種類の人間でないと思へたのである。

さらばといつて、ある快樂を得んために此處に來たといふことを自分ながら打消すことは出来なかつた。

『女に興味を求めて！』と吉郎は口のうちに言つた。

五

吉郎はすべての哲學を疑ふことが出来ても、此の自然界に男女の兩性が分たれてるといふ事實が無意味でないといふことを否定することが出来なかつた。而して何のために分たれてゐるかといふ意味について考へずにはゐられなかつた。性慾の問題はすべての本能のうちで最も力強い、否定することの出来な

い事實であると知つた。男性が女性を知りたいと思ふ慾望は、理性では容易に押へることの出来ない力である。既に是迄幾人かの女を知つてゐる吉郎にとつて此上女を知らうと欲するのは、或は一種の興味に過ぎないかも知れない。しかし自分では動かすことの出来ない根底のある興味である。この興味に惹かれて、彼は到底古來から人々が解くことの出来ない惑溺の深淵に陥らうとしてゐるのかも分らなかつた。而して彼にはこの終りない深淵に陥つて溺れて死ぬことをせめても人生の探究者として甘ずるといふやうな氣があつた。たゞすべての女性を知りたいといふことを興味といふのは間違つてゐる。吉郎にとつては少なくとも眞面目な、自分でどうすることも出来ない要求である。人生の殿堂についてゐるすべての窓は彼の眼には疑ひのあるものとして閉じられた。たゞこれだけは疑ふ餘地もない人生の事實である。

多くの友人や、學者が他の方面に研究の手を擴げて勉強してゐる間に、吉郎

は人間の墮落として捨てられた路を、卑しむべき男と見られながら歩いて、最も人生に顯著な異性間の消息について成べく多くを知り、深く考へ、而して人生といふものゝ眞の味ひを知つて見たいと思つた。而してこれが最も原始的に人生を知るためには間違ひのない見解の如く感ぜられたのであつた。

彼は痛切に生活を感じるやうな智識を自からの經驗に基いた發見に求めやうとした。而して率直に人間に向つて盲目的に出来るところまで打當つて見やうと欲した。同時にすべての人がさうである如く誰も人前では隠してゐるやうな性慾に關してたゞ二人女と對する時に野獸のやうな自分自身の淺ましい姿をも見詰めたと思つた。

此時彼には頭を占領しゐた思想の空隙から射し込んで來たやうに妻の姿があまりくゞと眼に浮んだ。彼は其の顔を掻き消さうとして頻りに振つたのである。何となれば青い妻の顔は彼に精神的の自覺を與へたからである。神経が過敏に

なつて肉體の衰弱を感じてゐる彼には此の場合肉慾の實感を興奮させるやうな刺激をもとめて、其の方に空想を走らしてゐたからであつた。夜の風は河を隔てた對岸の黒ずんだ林に鳴つてゐた。河の水はちら／＼と火影を亂して流れて行つた。三味線の音はたるんだ皮を叩いてゐるやうに、寂寞とした夜の空に躍つてゐるやうに聞えて來た。

吉郎は無意識に戦く足に力を入れて濕つばい積殻の木蔭から出るとぬかるみを大跨に歩いて明るく燈火の差す料理屋の方へと憧がれて行つた。

彼は快樂を追ひながら心のうちが頻りに淋しく悲しかつた。たゞ今夜を愉快に送りたい。自分の曾て経験しなかつた、また想像のつかないやうな事件に觸れて見たかつた。このやうな事件を造るためには彼はあらゆる男性の權威も擲つて、羞耻をも忍んで見る氣であつた。而して彼は今迄の自分とは全然違つたやうな自分を數分間の後に見出すことが出來たのであつた。

『今晚は……』と吉郎は料理屋の紺色の暖簾をくゞつて中を覗き込んで言つた。白粉を顔から頸に厚く塗つた女が、誰かといはぬばかりに此方を向いた。而して全く見覺ひのないのを自分が忘れたのでないかと頭を傾げてまだ手から三味線の撥を糸に當てたまゝ放さなかつた。

『ごなた……』と少したつてから張合のぬけたやうな、疑ひを含んだやうな聲で言つた。

『もう忘れたのかい……』と吉郎は極めて平氣を装つて言つた。こんなこととかう自然に口に出すのは昔の自分のなし得なかつたことだと感じた。而して心のうちで女が自分を知つてゐるやう筈のないことを思つた。

『お上んなさいよ……』と女は尙ほ疑ひの腫を此方に向けて、記憶に残つてゐる人々の顔を探して考へてゐるらしかつた。吉郎は大膽に、たび／＼來た家の如く二階に上つて行つた。而して六疊の室に坐つた時に始めて來た室の裡を注

意深く見廻した。何處にもかういふ種類の家には特有の濁つた空氣のうちに癡顔と逸樂との快い氣分を感ずることが出來た。間もなく眞白な顔の女が階下から鼻唄をうたつて上つた來た。而して吉郎の前に來て飯臺を挟んでさもしかつめらしく坐つた。

『お誂は、何にいたしませう……』と女が言つた時、吉郎はこんな境遇に身を落した女にも、まだ不斷の警戒があるといふことを知つてしみじみと女の顔が眺められた。而して何處に此の女の顔に其の言葉の與へたやうなしかつめらしい貞操の名残の影があるかと探したのであつた。

吉郎は曾て見もしなかつた、まだ知りもしなかつた女と向ひ合つてゐた。しかし曾て知つた其等の女と何處に異つたところがあらう。幾百人の女は畢竟女にしか過ぎなかつた。物質の前に肉を賣り、肉の要求のために精神を踏み付けて來た女に過ぎなかつた。今かうして二人は何となくよそ／＼しくして坐つてゐ

る。これは二人の間に目に見えない恐怖が横はつてゐるからでないか。禮儀とか羞耻とかいふものはかういふやうにごん底まで墮落し切つてゐる女にも、また自分に於ても、もうとづくに失なつてゐる筈であつた。

社會の表面だけを見てゐる時には人間といふものは美しいものであるといへるが、一步裏面を見たらどうであらう。其等の人々の毎日思つてゐることは何であらう。其等の人々が隠れてなしつゝあることはどんなことであらう……其處に人間と野獸と幾何の異つたところがあらうか……或者はそれよりもつと残酷である。或者はそれよりもつと姦淫を恣にしてゐる。禮儀とか耻羞とかいふ觀念は彼のロマンチック時代の名残にしか過ぎなくなつた。この世紀末の現實生活に打ち當るなら、容易に其の紫の霧のやうな幻影が打ち壊されることの出來るものであつたことを知つた。今此の處にかうしてゐる男と女との間には、たゞ互に知らなかつた森を通る時分に感ずる位の恐怖心以外には何物もな

かつた。もし、此室に點つてゐる電燈を消して、互の眼の中に閃めく疑ひ深い瞳の光りを見ぬやうにして、二人の心から強いて恐怖心を消し去つてしまつたなら、二人は恰かも野獸と化し去つてしまふのであつた。

吉郎は常にかう思つてゐた。人間の思想程赤裸にして見ることが出来たならば、怖いものはない。他人の思想は、他人の眼に見ることが出来ない。だから一般的なことを互に考へてゐるか分らない。もし見ることが出来たならいかに残忍であるか、醜惡であるか、淫亂であるか、利己的であるか、思想を其儘行爲に現はしてゐる野獸に比して決して譲るものでない。人間の思想を制限してゐるものは即ち、自からの肉體である。肉體を安全に保護するには、思想を赤裸に示すことが出来ない。かうして靈と肉とは人間の行爲を制限して惡魔とはしないばかりである。人間は肉のために悶えるばかりでない。最も怖るべきもの、最も残忍なるものは彼等の抱いてゐる思想其者である。吉郎は女がこんなことを考

へてゐるかと思つた。

彼は女に酒を強いて、自分も頻りに酒を飲んで、思想を朦朧たらしめることにつとめた。二人の心から、恐怖を去つて——むしろ此の場合女の心から恐怖を去らうとして——嵐のやうに軀をめぐる本能を赤裸に實現したいと思つた。これが即ち吉郎にとつて人生の偽らざる經驗であると考へられた。動物として本能を能ふだけ實現することは即ち幸福である。

窓の外には風が暗い空を横ぎつて吹いてゐる音がした。風の音に混つて、河水の轟きが聞き取られた。女が酒を取りに起つた後で、吉郎は窓際に出て障子を開いて、遙かに複雑してゐる建物の黒く浮き出た町の方を眺めた。飴色に夜の空は、都會の燈火を反映してゐる。而して南の方は靜かに青味を帯んだうちに、一脉の明るみを湛へてゐる。たへず小さな音楽のやうなうめきを上げてゐる都會は巨大な動物が其處に横はつてゐるやうな氣持を與へた。而して吉郎は

この夜が腐爛して行く裡に、この巨大な動物の胎内を疫病が處々に黒い染みのやうに犯しつゝあることを思ふて恐怖を催うした。明朝の新聞を見るまでは、幾人今夜のうちに疫病に斃れてゐるか知ることが出来なかつた。

彼が魔されるやうな空想に耽つて、遠く飴色の空に見とれてゐる時に白粉を濃く塗つた別の女が上つて来て、躰を摺るやうにして窓の外の物干臺に出た。女は雨風の吹く闇の中に立つて竿から、濡れてゐる洗濯物を外してゐた。風は、しきりに吹いて女の取り外しかゝつてゐる濡れた巾に當つた。バタ／＼と鳴る巾の吹かれる音が何となく暗い陰氣なわびしい感じを彼の心に與へた。女は黙つて洗濯物を外すと窓の口に頭を出した。其處までは燈火の光りが僅かに泳ぎ付いた。亂れた髪は風に颯られて、女の顔には青白い疲労の色があつた。

『ひどい降りになつたね。』と吉郎は闇を見詰めながら女に話しかけた。

『左様でございます。』と其の女は言つて洗濯物を固めて脇の下に抱へながら下

に急いで行つた。

彼は二たびチャブ臺の前に戻つた。而して暫らく耳を澄して風の音を聞いてゐた。冷かな夜氣はしみ／＼と室に迫つて来て、秋の老けて行くことを思はせた。彼の心は、冬の前に差し迫つたといふことを感ずると共に傷んだ。連想は遂に故郷の枯れ果てた寂しい山に老ひたる両親のゐることに思ひ至つた。また病める妻が、今夜寂しく燈火の下に思ひ沈んでこの木枯の聲を聞いてゐることを考へた。斯く自分の周囲の人々は、苦しみを味はんがために此の世に生きてゐるやうに考へられた。人生とはかうしたものであらうか？

吉郎は二たび女が階下から上つて来た時に全く氣を換へて相對することが出来た。而して心に思つてゐない、また頭にて考へもしないことをたゞ口の先で面白く言つて見た。女もまた心にもないことを言つて、二人はかうして兎も角も此の場を面白く見せるのが互に世情を解してゐる人のなすべきことのやうに

考へたのである。

彼はどんなやうに今夜が新しい経験によつて送られるであらうかと思つた。而して自分の身を出來るだけ其の新しい経験に觸れしめたいと思つた。其れには今夜をこの女と共に送つて見なければならぬと思つた。而して此家から何處かへ女の行く後に従つて行つて見なければ、其處にどんなやうに生活に苦しめられてゐる一家が、私等二人の宿をするであらうか分らない……其の家は、町の何處にあつて、どんな人々が住んでゐるであらうか……全く想像も出來ない境地に自分の身を入れるためには、自分は暫らくこの女の前で柔順に、新しい経験の前に沈黙でゐなければならぬと考へた。一方にはまた吉郎は作家であつたから、自分が其等の人々の社會を描く時に、覺えてゐなければならぬことだといふやうな利己心のあつたからである。

436

『十二時が過ぎたら、またいらしやいね。』と女は幼児にでも言ひ聞かすやうな

夜 暗

437

物の言ひ方をした。

外は黒い幕を垂れたやうに眞暗であつた。風は募つて、雨が益々降り出した。吉郎は疑ひ深い眼で女の瞳を見た。いかなる秘密をこの女が持つてゐるだらうかと考へながら、而して暫らく黙つてこれに答へなかつた。

『いゝでせう……何處かへ行つてゐらつしやいよ。而して十二時が打つたらいらつしやい……あなたさうなさいよ。』と言つて、女は艶めかしい風をして、男の意識を晦まさうとしながら男の躰に摺り寄つて來た。しかし吉郎の冷めた心持は、女の媚びた身形や言葉つきで何ういふやうにも動かされはしなかつた。『こんな暴風雨に出て行つて、己は何處を歩くのだ。』と吉郎は暫らく考へてから女に訴へるやうに言つた。

『だつて、今からちや早過ぎて困るのですもの……』と、急に女は愛想のない言葉つきになつた。吉郎には女が誰か來るのを持ち懂がれてゐるやうな様子に

夜 暗

も見えた。而して兎も角此夜をこの女と共に過して見るのには、自分は此の場合すなほでなければならぬと考へた。自分の心は今何に餓えてゐるであらう……肉であらうか？ それとも單に興味であらうか？——たゞ自分はこんなことを考へる間にも淋しかつた。而して此の世界の何處かに、自分を抱いてくれる親切な女を欲しいと思つたのだ。

『ぢや、また來るとしやう……』と言つて、吉郎は煙草に火を點けて帽子を手にとり上げた。

此の時階下で、男の聲が聞えた。女は耳敏く、熱心に下の様子を聞きとらうとしてゐる。而して吉郎の其處にゐることを忘れてしまつた。吉郎は階段を下りかけて女を振り向いた。

『この寒い晩に、これから何處へ行くだらう……十二時になつたら來るよ。』と言つて、女の顔色を覗つた。

女はたゞ黙つてゐた。未來といふものは……次に來るべき經驗といふものは……全く彼の思考を超越して戰える程嚴肅なものであつた。

吉郎は外に出ると、雨の沫きが横さまに來て熱つた頬に當つた。何方を向いても眞暗で風が強くて進むことが困難であつた。彼はこれも一つの自分といふものを造る上の仕事であると思へて、泣きたいやうな思ひで下のぬかるみを軒燈の火影で拾つて此の料理屋の前を離れた。

虚偽の顔

私は椅子に腰をかけてゐる。冬の午後の日の光りが背後の硝子窓から射し込んで私の片頬を明るく色づけてゐる。眼の前の硝子窓に内側から垂れ下つてゐる白い布には人の氣の付かないやうな處に一つの小さな黒い染みがついてゐる。私はそれに目を止めて昵として今自分が描かれてゐるといふことを思つてゐた。

畫家のYは忙しさに手を動かしてゐるのであつた。微かに音を立て燃えて

ゐる氣はひのしたストーヴの中の火はいつしか燃え盡きてしまつたと見えて音が聞えなくなつた。何となく廣い畫室の中には灰色の沈黙があつた。戸外の曠野を占領してゐる冷かな空氣が隙間から次第に忍び込みつゝあるのを感じた。

私の眼は白い雪の上に出てゐるやうな一つの黒い點に止つてゐる。他を見ることを許されないものゝやうに動かなかつた。時々眼に射し込むYの鋭い瞳の光が自分の顔の面に動く表情を読み取らうとしてゐる。残忍、淫蕩、薄情を掩ひ隠さうとする神経が其たびに動搖を感じる以外に全く造られた人間のやうに身動きすらしなかつた。私は藝術家を尊重するために靜かに胸の裡で呼吸してゐる精神が、全く嚴肅に全我的に働いてゐる藝術家の精神の呼吸と一つになりたいて努めたのである。其れが此場合自分の精神の上に感じた義務である。けれど私の心は畫家が顔の面に現れた表情は、さながら月の面に現れた現象を天文家が見脱さないといふやうに何物も見脱さないといふ眼の色によつて束縛せら

れてゐた。

たとへ、此の畫室にはいろ／＼の繪がかゝつてゐるといふことも、背後にはテーブルがあつて、其上には葡萄酒の罍が載つて、蜜柑の盆が出てゐるといふことも、また脇の窓際には葉の紅い草花が壺の中に活けられてあつたといふことを考へないではなかつたけれど、何となく心は描かれてゐる自分を精神的な人間に見せたいと思ふ感情に支配せられてゐたのである。『人物を描くのは面白い、絶えず變化があるから……』と言つたYの言葉が思ひ出された。

私は心に思つてゐることは顔の面に一種の表情となつて或は崇高に、或は深刻に、或は無邪氣に、或は厭世的に、或は野卑に見えるだらうと思つてゐた。私は自分の顔がどんな風に板の上に描かれるかといふことを氣遣つた。すべての人間は果して自分と同じやうに執念深く一つのことを考へてゐるやうなことがあらうか……自分は果して高尚な人間であるといふことが出来るだらう

か？ 私の心が其儘顔に現はれてゐるとして、畫家が其の儘描いたなら動物的の表情にそれが見えるやうなことがなからうか……さう見えたならなんでそれが悪いのであらうか……もし悪いとしたなら、誰に對して？

それは自分の心に思つてゐる思想の如何によつて表情が定るのであらうと思つたから、私はせめて此の瞬間に於てだけでも極端に精神的の人間になりたいと思つた。曾て經驗した淋しい、悲しい、しみじみと眞面目であつた自分の姿をもう一度記憶から呼び返して見たいと思つた。

私はやはり窓際に垂れ下つた白い布に出てゐる一つの黒い染みに目を止めながら、いろ／＼の自然に向つて立つた時の自分の姿を心の眼に描いてゐた——私は秋の日に高い丘の上に立つて自分の住んでゐる處を脱れて來たものゝやうにこの都會を見下してゐた。黒い一つの點となつて、都會の建物が雜然として濤の如くに家根と家根とが重なり合つて眼の下に集まつてゐるのを見た。私

はたゞ獨であつた。淋しかつた。銀杏色に日は哀しみに傷んで暮れかゝつてゐる。建物の中からは遠くに當つて黒い煙が上つてゐる。鼠色の雲の出てる空にいろ／＼の響きが聞えて來る。幾百萬の人々が其處に生活をしてゐるのだと思つた。複雑な人生の喜びと悲しみの絲が縦横に織られてゐるのだと思つた。泣き叫ぶもの、喜び笑ふもの、さまざまの人々の姿が眼に浮んで來る。私は自分の天職について眞面目に考へざるを得なかつた。冷かに靜かに觀察してこの都會の意味深き生活を描き出すことが出來たならいかばかり愉快であらう。涙の染むやうな悲壯の感じに打たれた。私は其の時の自分の姿を思ひ出した。

忽然として畫家Yの鋭い瞳の光りが電のやうに疲れかゝつた空想を掻き亂した。私の心は二たび現實に引き戻された。而して今自分が描かれつゝあるといふことを意識した。もう一度落ち付いた表情に返らうと心に苦しんだのであつた。しかしもう二たび柔かな雲の動く、高い空の下の丘の上に立つて雜然とし

た都會を見落してゐるといふやうな氣持に歸ることが出来なかつた。
 雪のやうに白い布に付いてゐる黒い一點に睨と眼を止めてゐながら、さま
 ぐの空想に心を委ねて現在の自分を忘れやうとしたのである。雪！雪！と心
 の中で繰返して言つて見た。私は雪について多くの經驗を持つてゐる筈であ
 った……

雪は漸く晴れ止んだ。眼の前に限りなく開けてゐる廣い雪の野原は次第に灰
 色を増して来て、ぼんやりとして暮れるに間がないことを知らせてゐた。大分疲
 れた足を道もない圃の上に運んで其の雪の野原をさ迷つた。野原を横切ると常
 盤木の見える山の麓に出た。村に歸つた人の通つた足跡がついてゐる。其のあ
 るかなしかの道を辿つて行くといつしか山と山との間に差しかゝつた。

兩方の山には黒ずんだ松林が雪の白い衣を被て音もなく立つてゐる。寂然と
 した境に下を向いて山の大きな懷ふとこに入つて行くやうに、白い雪の上に僅かにつ

いてゐる足痕を拾つて行くと黒ずんだ大きな池のほとりに出た。

私は方角を考へた。今、北の方に向つて池を隔て、彼方の山に對してゐた。

山は化粧したやうに地肌は白かつた。たゞ處々白粉が剝げたやうに雜木林が黒
 くなつて雪の中から頭を出してゐた。

山を掩ふてゐる松林はいづれも雪の重みでうなだれて深い思ひに沈んでゐる
 やうであつた。而して下から黒い喪服を着てゐるやうな躰が現はれてゐた。山
 と空との接してゐる灰色の一線は、何といふことなしに物悲しく感せられた。
 なんでかう自然に對すると淋しいんだらう……私は暫らくこの音もない天地の
 間に一人立つて耳を澄まして静寂の呼吸を心に感じてゐると、遠く山を越えて
 北海の波の轟きが鈍く物憂く白を碾いてゐるやうに雪の平野の上を轉がつて聞
 えて来る。

私は何を思ふとなくある大きな永劫の悲しみに觸れて眼を閉つた。此時頭の

上に羽ばたきをして沈黙の灰色の空気の中に音を立て、行く鳥の影を認めた。眼に血が漲つた。忘れてゐた肩の銃を取り上げて灰色の空にゆつたりとして飛んで行く鳥の姿に的を定めた。

書室の外で鴉が啼いた。私は僅に空想を破られた。而してYが熱心に自分を描きつゝあるのを知つた。

ねばり氣のある銃聲は、忽ち静寂の天地の裡に吸ひ込まれて、青い煙は、寒い北風に名残なく消えてしまつた。同時に空には鳥が飛んでゐなかつた。たつた今迄生きて飛んでゐた鳥は、もう屍となつて池を塞いだ雪の上に落ちて其處に黒くなつて點のやうに動かなかつた。私は、たゞ其の鳥の命を奪つたばかりで其の鳥をどうすることも出来なかつた。私は犬を連れてゐなかつた。私はなんで池の上を飛んでゐる鳥を殺したのだらう？……なんで無益な殺生をしたのだらう？……

私の顔には人間本來の残忍が現れてゐる筈だと思つた。

白布の上の一つの黒い染が、白く雪の鎖した池の上に落ちた鳥の黒い姿となつて見えた。私は其の黒い一點に瞳を止めて暫らく睨としてゐた。

書室の中はだんぐり暗くなつて來た。白布の面がちやうど雪の野原の暮方の色調を感じさせた。Yはたえず私の顔の上に動く微細の表情を見脱さずに、飽迄何等かの個性を描き出さうとしてゐた。

私は心のうちで、鳥を銃殺した刹那の残忍な表情が、Yにいかなる印象を與へたであらうかと怖れてゐた。

なんで自分は眞の自分を見ることを怖れるのであらうか？……此時私は平常見てゐる人間の顔は悉く虚偽の顔であると思つた。

白
い
路

私が毎日自分の務めてゐる小さな會社へ通つてゐました其の時分のことであ
ります。来る日も来る日も單調な生活に私は殆んど氣が鬱ぎました。たとへば
夜が明けると私は床の中で新聞を読んで、いつしか頭が重くなりますと起きて
顔を洗つて飯を食べます。其れから机に向つて何か書いて見ようとペンを採り
ますがどういふものか氣ばかり急いで何一つ頭の中で纏りが付かないうちに、

もう會社に行かなければならない時刻になるので、私は仕方なしに家を出ます。が道を歩きながらも頭の中でいろ／＼と書かうと思つたことを繰りかへしながら、茫漠とした空中に白紙を擴げて文字を書き付けてゐるやうな氣持で、眼は屹と足先ばかりを見詰めて四邊に注意も拂はずにとぼ／＼と淋しい裏道を歩いて町の方へと向ひました。毎日同じい道を同じ時刻に歩くので何も變つたことはない。空の色も同じやうであれば、兩側の灰色に朽ちかゝつた家も同じい感じを與へるばかり。而していつも私は何かある不快な事件を豫想してゐるやうな鬱いだ晴々としなない心持で、うす曇つた空を仰いで雲の形などに氣をこめて見るのです。幾人の藝術家が、果してのんきに雲を研究しようと思つて、かうやつて空を仰いだらうかなど、考へました。而して其時自分の意氣地ない姿を自から嘲りながら、いつまでこんな單調な生活がくりかへされるのだらうと思ひました。

しかし私は町へ出ますと歩いてゐる人々や店頭の色々の色彩が眼について、いつしか胸の中でくよ／＼と思つてゐた憂へが忘れられて、頭の中では今迄考へて來たこと、異つたことを考へてゐました。私は一つの空想から他の空想に移る時分はどんな心持で町の何の邊の處を歩いてゐたらうなぞ、考へて見ましたが全く氣の付かない程滑かに霧が切れて、また繋がつたやうなものであつたのです。而して家を出る前に机に向つて是非書いて見たいと思つた思想は、もはや過ぎ去つた雲の跡を眺めるやうにうすい印象がぼんやりと頭の中に残つてゐるばかりで、今それを探ねて未成品として味つて見ても始のやうな鮮かな興味を惹かなかつたのであります。

かうして私は何となく埃りつぽい會社に行つてからも、やはりくよ／＼と思ふ心には變りがなかつた。昨日と同じいやうに社長の顰め面を同じいやうな反抗と不快な心持で横目で見て、こゝにいつまで自分はこんな仕事をつつけて灰

色な日を送らなければならぬのだらうと考へながら、漠然とした憂へに心が捕へられて、まだこの先きこんな灰色の日が果しなくつゞいてゐる未來を空想に描いて見ると、いつそ自殺してたえず生活の不安に心を痛めてゐるやうな此の世界にゐなくなつた方がいゝやうな氣持がした。自分が死んでしまへば憂へが無くなるばかりでない。この考へてゐる自分といふものもないのである。もとより此の音の聞えて、物の動いてゐる世界といふものもない。何にもかもなくなつてしまふのだといふやうなことも考へたのでありました。

私は會社にゐる間は早く午後の日暮方となつて家に歸る時刻になればいゝといふことだけが頭に浮んだのであります。而して時々思ひ出したやうに頭の上にかゝつてゐます時計を眺めて、茫然として始めて發見したやうに、時計の針の動きの遅いのを思つたり、あの長い黒い針がもう二たびこの圓盤を廻らなければ歸る時刻にならぬのかと思ふと、殆んど絶望せなければならぬ程長い未

來を待たなければならぬやうに感じられたのであります。

いつしか長い黒い針は見えるか見えない程の遅い歩みをつゞけて白い圓盤を二ためぐりしました。而して私は歸る時刻が來て、會社を出たのであります。遂に待ち憧がれてゐた青々とした自由な大空の下に出た。しかしどんな希望が門の處で私を迎へてゐたのであらう。會社の門を出ると私は何にも自分の心に喜びを與へるものゝないことを知つた。今更ながらなんであんなに歸る時刻の待たれたのが不思議な位であります。私は朝來る時と同じいやうに鬱いだ氣持になつてとりとめもない空想に耽りながら、とぼくと同じい道を家に歸つたのであります。

殊に秋の日などは家に歸ると直に日が暮れてしまひます。或時は途中で日が暮れて、燈火が町の兩側の店頭に點つて、紅い夕焼の色が西の空を彩つてゐるのを見ました。紅い色は次第に青黒い波に洗はれて、色の褪せて行くのが何と

なく悲しかつた。黒い電信柱は其の方向に小さくなつて走つて見えます。其の彼方の遠い處にも人が歩いてゐます。

私は家に歸つて夕飯を食べてしまつてから其處に横はると、動物的の倦怠を身に覺える刹那、ある感激が自分の頭を刺激し……奮闘しなくては駄目だ！……さながら電光のやうに閃めいた反省に勵まされて、私は跳ね起きて机の前に坐つて慌しく書を読みかけたり、また何か書きかけたりいたしますと、潮のやうに流れて来る晝間の疲れともいひますかいつとなしに躰がだるくなつて、頭が鈍くなつて、欠伸が出て、何もするのが非常に厭になつて、かうして机に向つてゐるのすら大儀に感じられたのであります。

『これではいけない』と其時は自分でこの雲のかゝるやうに身を襲つて來た倦怠に抵抗した。しかし氣ばかり立つても何をしようと思つてもはつきりと印象が頭に映じて來ないのと、しつかりと考へが纏らないので砂原を歩いてゐるや

うな氣がして、努力が何の役にも立たなかつた。仕方なしにランプの火影を見詰めて夜の更けるのを感じながら、自分でもかうしてゐるのが無益だと思はれたのであります。どうせかうして鈍い頭を擲つて、無理に勉強しても役に立たないと思つたなら本能の赴くまゝに委せて安らかに眠た方がいゝと思ひました。而して疲れた躰に快い休息を興へて、元氣を回復するやうにした方が明日新しい仕事をする上に都合がいゝと考へて、其夜はそれで勉強を止めてしまひました。長い腐れたやうな暗い時間が音もなくつゞいた。私は胸苦しいやうな夢に魘されました。

やがて薄膜を剝ぐやうに夜が破れて、冷かな雲母色の雲が赤い太陽を産んで二たび世界を黄色な惱ましい光りで照らした時、靜かに、灰色の天地が私等の眼の前に昨日と同じいやうな形を現はした。全く其の天地には昨日と少しも變りのない同じいやうな事柄がくりかへされました。而して私はそれに對して同

じいやうな意氣地のない小さな不平と反抗心と不安を感じました。しかし私は其上どうするといふやうな手段も分らなければ、従つて勇氣もなかつたのです。私は家の前を車が通り始めた前から床の中でとつくに眼を開いていろくど生活上に幸福を來すやうな運動について考へてゐたが、何うしていゝものか分らずにいつまでも枕から頭を上げる氣になれなかつた。急に洞穴に陥つたやうに自分の一生はどうなるだらう……といふやうな暗い狭い行き詰つた考へだけが宿題のやうになつて頭の中に残つた。私はそれを考へはじめたが、だん／＼自分が年を取るにつれて寒い、暗いやうな果しない路を歩かなければならぬやうな氣がして何となく考へたくなかつた。私は床の中で解決の付きさうもない煩悶をついけてゐるうちに頭が痛くなつて來た。而して昨日よりも今日は遅く起きて、顔を洗つて飯を食べると机に向つてゐる暇もなくて、もう會社に行かなければならない時刻が來た。

私は慌てゝ家を出ると、いつの間にか途中から歩みが遅く鈍つてしまひました。それはやはり常の如く下を向いて歩きながらとりとめのない空想に耽つて物を見、音を聞くと、たえず心の中に射し込んで來る不安に神経が襲はれてゐたからでありました。

いつまでこんなやうな人々から存在も認められない單調な仕事をして、自分は毎日のやうにこの道を往復せなければならぬのだらう……而して何時か自分がこの會社に行かなくなつた時分には、自分の生活はどういふやうに變化してゐるだらうかなど……現在に對する反抗心と同時に未來の生活に對する不安のために、常に纏つた考へも抱かずに埃の立つ道を歩いてゐたのであります。

私は町へ出ますとだら／＼と爪先上りになつてゐる坂の下の片側にあります。小さな古本屋に立ち寄る癖がついてゐて、つひ其處に立寄つて見る氣になります。最初はたま／＼其の古本屋に立寄つて見ると思ひがけない新しい外國の書物などが出てゐる時がありましたので、喜んで其れを買つた時のことがいつまでも忘れられないで、其の本屋の前を通るたびにまた立寄つて見る氣になつたのです。誰か新しい書物を取り寄せては、讀んでからこの古本屋にきめて賣るやうな人があると思つて、たび／＼私はこの古本屋で思ひがけなく欲しいと思つてゐる書物を探し出したことがありました。始めはそんなことで、會社の往來にこの古本屋の前を通ると三日か四日目にはつひ足が其の店頭に向つたのでありました。しまひには欲しいと思ふ書物があつても、金がない時には其の書物を月給を受取る月末まで他人に賣らずに抜き出して奥へしまつて置いて待つてゐてもらつて、月給の渡つた日の歸りに受取つて來るやうなこともあつて

其れ程この店の人々は顔が馴染になつたのでありました。

それで私は常に古本屋の店へ入ると先づ直に洋書を並べてある右側の棚の前に立つて眼をいろいろの色合をした背表紙に刻み込まれた金文字の上に晒らしたのです。金文字は私にそれ／＼深い意味を語つてゐるやうに見えました。最近世にかゝはるもの、最新の思潮にかゝはるもの……それ／＼私には深い思ひを誘ふやうな題目に眼をとめて少時の瞑想を誘ひました。それから私はいよ／＼彼方に向き直つて笑みを含んで店の人々に挨拶をしたのです。私が例の如く棚の前に立つて書物を見詰めてゐます間に店で番頭のSが聲をかけますのが耳に聞えました。私は笑顔になつてSのゐる處に行つて腰をかけて話し込むので、或時はつひ社へ行くのが遅くなることもあれば、或時は家へ歸るのが遅くなつて全く暗くなつたこともありました。

この古本屋にはSの他にSよりずつと年下の十五六になる少年がゐて、やは

り此の古本屋に小僧をつとめてゐたのです。私はこの店に来るたびにこの小僧と顔を合はしたけれど何となく陰氣な至極口數の少ない瘦せた顔色の青い少年であると思ふばかりで別に話をしたやうなこともありませんでした。たゞいつもこの少年は何か考へてゐるやうに、茫然と町の往來を見詰めてゐました。其の瞳は何處に止つてゐるのか他人には分らないやうに、落ち窪んだ眼底にぎんよりと光つてゐました。さうかと思ふと或時は、この少年が店の片隅の方で色鉛筆で何か畫を手帳に描いてゐるやうな様子でありました。

またある時はこの店頭にはたゞ一人この少年が片隅で、いつものやうに色鉛筆で畫を描いてゐる他番頭のSもまた顔のとげ／＼とした此の店の主人もゐない時があります。私は書棚の前に来てこの前に見た時と變りのない見覺えのあつた書物に目を晒らしてゐますと、小僧は別に聲をかけるでもありません。また私に氣をつけて見ようともしませんで、知らぬ顔で下を向いて畫を描いてゐま

した。すると二三人の小學生が店に来て、何か學校用の書物を聞いてゐましたが、少年は相變らず下を向いて色鉛筆を動かしてゐるばかりで返事もしなかつたのです、私はどうしたことかと小僧を振り返つて見ました。其の時小學生は大きな聲で、二たび書物の名を言つて無いかと聞いてゐるのでした。すると小僧はよくも其の聲を聞かずに「ありませんでした」と言つて、熱心に下を向いて畫を書きつゞけてゐました。私は其の時、何となくこの小僧を面白いと思ふ氣になりましたが、また主人がゐたらごんなに此の小僧は叱られるだらうと思つて何となく微笑まれたのでありました。

私は古本屋を出ると午前の日光が賑かな街の往來を明るく照らして車や人が浮き出たやうに動いてゐる其の間を歩いて停車場の方へと行つたのであります。私はこの停車場から電車に乗つてある地點まで行き、其處の停車場で降りて石段を上つて往來に出てから鐵橋を渡つて會社の方へと歩いて行つたのであ

りました。停車場は土手の下にありました。電車道からプラットホームに達するまでの長い間には途の両側に櫻の木に混つて柳の木が植ゑられてあつて、春の頃には柳の淺緑が柔かな夢のやうに萌えて、曇つた日の空に黙つてゐることもあれば、晴れた風のある日には、日の光りに銀のやうに輝いて見えることもあります。

ある時には土手の上にも、下にも櫻の花が白く咲いてゐるのを、都會を照らす春の月は一様に淡く、悲しく、物優さしく照らして、花の色がほんのりと浮き出てゐるのを見たのであります。また夏になるとこの柳の根の周圍の白く乾いた地の上に圓い黒い影が出来て、濠へ釣に來た町の子供等が其處で遊んでゐるのを見ました。傍に置かれた手桶には水が入つて中には白い腹を出した小さな魚が二三足ぱくく息急しさうに水を飲んで吐き出してゐる。而して地面の上に投げ出された釣竿の糸は纏れて、赤い浮が上の方に吊下つてゐる。子供等

はもう魚の死にかゝつてゐることも知らぬ顔で何か面白さうに話をしてゐます。其の子供等の間に入つて町から此處まで遊びに來た、乳飲兒を負つた子守等が立つて何か小聲で唄ひながら毛糸の編物などしてゐるのを見ました。しかしこの唄も死にかゝつてゐる魚には何の關係もなかつたのです。

C 停車場の構内から市街を望むと町を行く人の群が坂を上つたり下つたりしてゐるのが黒く蟻のつゞくやうに入れ違つて見えて、あちらの小高い丘の上には木立が繁つてゐる間から家々の瓦家根が重なり合つて光つてゐるのがちやうど大海原に起伏してゐる波濤のやうに眺められて、其中には白く塗つた西洋造りの建物が見えたのであります。町から町へ無限についでゐる都會の煤烟にうす濁つた空は遙かに霞んでゐます。其の霞んでゐる空には廣い野原を見下して走つて行く雲が掠れてゐます。また何處からともなく空氣に波動を傳へて無韻の音樂のやうに、絶え間なく流れてゐる物音が聞えて來ます。また暗い鉛色に

水のごんよりとした濠端の柳の木の植つてゐる下を走る黄色な電車が、白や、うす水色のパラソルを差してゐる人々の間を縫ふやうに彼方に行つたり、此方に來るのが可愛らしく小さくなつて見えてゐるのでありました。

人足の絶え間なく出入りしてゐる停車場の構内も、時によると寂然としてゐて、あまり人のゐないことがあります。ちやうど空氣の中に深い穴の出來たやうに稀れな現象であつて、忘れられた停車場のやうに、大きな時計の白い圓盤に黒い針が動いてゐるばかりの時がありました。私はこんな場合にも出遇つたことがあつた。驛夫が鳴らす鈴の音が、白く塗つた控室の寂然とした冷かな空氣に響き渡つて、其の鈴の音が暫らくして止むと、また停車場の裡は寂然としてしまつた。すると遠くの方から地鳴りを打つて汽車の來る氣はひがした。間もなく田舎から來た汽車が疲れたやうに入つて來て大きな長い軀を横へた。而して獸物のうめくやうに息苦しく煙を吐いた。客車に乗つてゐる人々の中には

物珍らしさうに窓から頭を出てし都會の光景を見ようとしてゐるものもある。此の停車場には五六人ばかりの人が下りた。五分間経つとまた汽車は次の市中の停車場に向つて動き始めた。汽車が煤煙を残して去ると共に驛長や驛夫は控室に入つた。其の後に輕快な響きとしやがれた笛の鳴音を立て電車が入つて來た。これにはみんな都會の人々が乗つてゐた。

私は常にこの電車に乗つて行つたのであります。停車場を離れると黒ずんだ濠水の上を蟲の這ふやうに漕いでゐる荷船を見ました。また濠端に白く積み上げられた小石の山を見下して、電車は進むにつれて昔から残つてゐる白い倉庫が並んで河岸に建つてゐるのも目の前に見たのであります。白い倉庫には、一つ一つ黒い其の家々の異つた定紋が付いてゐます。これを見ると日に月にうつり變りつゝある都會の中に、こればかりが昔のまゝに残つてゐるのが不思議なやうにも、また懐しい感じがしたのであります。もはや遠い昔のとりかへしの付

かない藝術として、ロマンチック時代の名残として——廣重の繪畫にあるやうな景色として——このあたりの氣分を味ふことの出来るのは恐らく私等の一生のうち位のものでありませう。

電車が走つてそれが見えなくなると、全く現代の混沌とした市街の中を、この高い土手の上を電車が走るのではありません。電車の窓から下の賑かな町の中を見下すことが出来たのであります。赤い旗が立つてゐる活動寫眞館の家根や硝子窓の光つてゐる會社や、紅い巾を乾した宿屋の二階や、白い道を走つてゐる自動車や、そんなものが瞬きする間に眼の中に複雑に映じて來て複雑な色彩と印象を頭に殘して去つてしまつた。

こんな景色は、私が毎日會社に通ふ時に途上で見る光景でありました。しかし格別私の頭に深い印象も與へることなく、眼に映るかと思ふと直に消えて、また形もなく忘れられてしまひます。而してまた明る日になると始めて見るや

うな氣持では等と同じいやうな景色を眺めて、しみじみと都會といふものゝ感じを新たにするのであります。

自然は長へに若いものと思ひます。私はいつか老いてこのいつまでも若い自然を殘して死んで行く時があるのであらうと思ふと悲しくなりました。

三

しかしかうして毎日同じ道を歩いて、電車に乗つて會社に通つてゐますうちに、いつとなしにこの單調な道筋からいろ／＼私の樂しみのない心に特種な感じを與へるやうな色彩を見出したのであります。たとへばC停車場を出てから餘程來てから、電車がある長い、高い石垣の下を通る時でありました。私は窓の外に押し迫つて聳えてゐる石垣を無意識にも見上げない譯には行かなかつたのです。何となれば其の石垣の下を通る時には急に電車の裡がうす暗くなつ

て、日蔭の冷かな空氣が身に染みるのを感じたからでありました。

私はこの白い疲れたやうな神経を刺激する灰色の乾き切つた石の色を厭だと思へば思ふ程、この石垣の處に差しかゝつた時に眼を閉ぢることも出來ずになぞく高い石垣を見上げなければならぬやうな氣がしたのであります。其の石垣はなんでも幾丁とつゝいて電車に乗つて通つても可なり長い間のやうに感じられたのであります。なんで私はこの石垣の白いやうな、灰色のやうな一種の陰氣な色をかくまで嫌つたのでありませう……このことを自分によく考へて見ると、たゞこの何處となく單調な色が厭であつたのです。なせこの單調な色が厭であつたかと考へると、ちやうど自分の生活のやうな色をしてゐるやうに思つたからであります。

470

私は思ひました。自分の頭は疲れてちやうどこんな石垣のやうな氣持を感じてゐる。自分の神経は常に濕ひを缺いて乾いてゐて、しかも激しく何物かに觸れば火花が散るやうになつてゐる。自分の生活はこんなやうに草の枯れた乾いた荒地のやうに、堅く、優しみのない、また木立も見えない平原のやうに行手に希望もなく、絶望的に思はれた。……たゞかういふやうな意味から、何となくこの石垣の白い乾いた色を見ますと、何の興味も起らない疲れ切つた心の蔭で無暗に反抗心をそゝるやうに不安な暗示的な感覺が感じられたのであります。しかるに或る日のこと雨が降りました。すると常にはこんな乾いた埃のかゝつた白い石垣が、まことに艶々しく雨が降つたので上が濕れて光りを含んでゐたのを見たのであります。私は樂々と安心しました。そんな日にはたゞ何となく私の心は張り詰めてゐたのが弛んだやうに一種の慰藉を感じたのであります。乾いて水を欲しさうに思つてゐた石垣が、思ふ存分に濡れてゐるのを見て、さながら自分のことこのやうに心の満足したのを覺えたのであります。

電車に乗つて石垣の下を通り過ぎて石垣が盡きるとやがて私の下りなければ

ならぬY停車場に着くのでありました、この停車場は市街の中央にかゝつてゐる鐵橋の傍にあつて、鐵橋の上を歩いてゐる人々が停車場を出る時に頭の上になつて仰がれたのであります。私は石段を上つて往來に出ました。

路い白

鐵橋の上を渡る絶え間ない人の足音や、車の音が一種の怒號のやうに耳を襲うて來ます。私にはこの音が生活の意識を強めました。また大都會の活動して一瞬間も休む暇のない光景を眼前に見るたびに徒らに生存競争といふ觀念を強くしたのであります。私はY停車場を出まして鐵橋を渡る時につひ今自分の電車から下りた、足の下になつて見える低地の停車場を振り返つて見る癖が付いてゐました。而して私が鐵橋の上を歩いてゐるとちやうど私の下りた電車が發車して鐵橋の下に凄まじい響きを立てながら過ぎるのに出遇ふのであります。其の電車が鐵橋の下を通り過ぎてしまつて、其の黄色な姿が彼方に彎曲してゐるレールの上を走つて行つて土手に隠れてしまつてから、なほも私はこの

鐵橋の上を歩いてゐる程この鐵橋の長さはありました。

この鐵橋の上には朝のうちから夜になるまでいろ／＼の仕事のない人々が此處に來て、ある時間の間茫然と立つて下の水の上に映つた空の色を心なく眺めたり、また人々の動いてゐる停車場の景色を眺めてゐるやうな姿が絶えたことがありません。ふと欄干から離れて、ふらく／＼と何處ともなく一人が去れば、また何處からともなく來た人が同じいやうに欄干に凭りかゝつて下を眺めてゐる、かういふやうな人が絶えなかつた。其等の人は大抵定つた職を持つてゐないやうな漂浪者が多いやうに思はれます。額際に何となく暗い愁が染んでゐて太い皺が深く入つてゐる。眼には冷かな痛ましい悲しみの光りがある。一見して失意の人といふことを現はしてゐます。またさういふ人の他には小僧もある。官吏らしい人もある。また商人らしい者もある。而してかうして忙しい躰のものも鐵の欄干に倚つて足の下の水を眺めたり、頻りに人の動いてゐる停車場の

路い白

様子を見守つたり、また眼を擧げて遠く見渡す限り起伏してゐる都會の大小の建物の家根が、さながら波濤の連るやうに日の光りを受けて輝いてゐるのを望見して、而して其等の都會から起つて來る物の音に耳を澄した時、彼等はこの慌しい活動の裡に、寂然として淋しい永遠といふものゝ姿の潜んでゐるのを無意識に感ずるのでありました。

すべての人はかういふ瞬間に於いて自分を反省するものである。其等の人々の中には僅かな此の時間に過去の生活を反省するものもあります。また行末のことを考へるものもあります。また全く何の仕事も持たないために、いかにして一日を送らうかと思ひながら、しかも心にたえざる不安の念に驅られつゝかうしてこゝに來てたゞ茫然として眼に映る慌しいこの都會の有様を眺めて除け者にせられた自分の怨みをかこちながら空想に耽つてゐるものもあるのです。

私もやはり其の人々の一人であつて、會社から家に歸る時には、暫らく此の

鐵橋の欄干に身を凭せて、遙かの建物の間に沈む赤い疲れたやうな落日を眺めて自分の儘ならぬ現在の境遇を思ひ、夕暮方の都會の色彩に、物音に、一日の長い生活の戰鬥の疲れがあり／＼とあるのを感じて、傷ましく思ふと共にいつまでも若い文明の微笑みが何となく都會を掩うてゐる大空の光りの裡に漲つてゐるのを感じて、一方には是等の刺激に心を躍らして遠い明るい世界に憧れながら、また一方には暗く寒い足下の水の面に宿る死の影を見て、滅びて行く人生の姿を考へぬ譯には行かなかつたのでありました。

私は毎朝この鐵橋を渡ると電車の路の十字になつてゐる交叉點に來て眼を四邊に配つて駆け抜ける注意を怠らなかつたのであります。不思議にこの交叉點に來ると毎日同じ緊張した心になつて、其の刹那だけでも文明を呪ふ氣になりました。其れから其の一筋のレール路について坂を上りました。レールは坂を上つて坂の中途から左につ曲てなほも高い坂を上つてゐます。其のレールの

折れ曲る角の處に左側には大きな果物店がありました。真にこの店です、私がこの果物屋の前を通る時にいつも眼を楽しませましたのであります。其の店頭の軒下の細い横硝子戸には金文字の英語で “Apple and Banana other fresh Fruits” と書いてありましたが、實際其處の店頭には色の紅くて美しい信州産の林檎や、また色の黄金色をした南洋から來たバナ、もまたオレンジも香氣の高い真黄色なザボンの實もまた時節ではないが紫水晶の色のやうな葡萄の實も籠の中に入つて山のやうにいろ／＼と重ねられてありましたので、冬の寒い朝の、日が上つてからうす靄のかゝつた中で見るのも胸に染み入るやうな冷たい快い色彩に瞳が燃え狂ふばかりでなく、また弱々しい晩秋の夕日の影がちやうど燐の火のやうにほんのりと果物店に映つてゐるのを見ましても、まことに快かつたのであります。

私は一日の間、單調な仕事をつゞけなければならぬ其の往來にこの果物屋の

前を通つてこの鮮かな色彩を見る時に何となく色彩の乏しい自分の生活の上に愉快な色の滴りを染み込めますやうに感じて、毎日果物店の前を通るのが楽しみの一つとなりました。

またこの他に、もう一つ自分の慰藉ともなつたといつてよかつたことがあります。これは全く偶然な發見で、自分ながら妙な處に興味を感じたと思つたのです。それは十五六の娘の赤い帯でありました。この果物店の前を通り過ぎてから、少し道幅の狭くなつた街を行くと片側につくだにや、奈良漬などを賣つてゐる店があります。其の店について角を曲つて、さらに狭い静かな埃の立たない通りに入つて、しばらくこの裏道を行きますと其の通りの兩側にはやはりいろ／＼の店があつて仕事をしてゐます。指物屋では毎日白い木を削つてゐます。私はこの白い木を削る勾ひが通りすがりに鼻にしみた時に、また木の屍ともいつていゝやうな白い板を見た時に私の感じた心持は決して氣を引き立てるも

のでなかつた。私は子供の時分によく通つた淋しい田舎の日蔭の町にある指物屋を思ひ出したのでありました。而して此の人々はやはり單調な生活を營んで色彩に乏しい、ちやうどこの白い板の色合のやうな感興のない日を送つてゐるのだと思ひました。また其の通りの反對の町の片側にはブリキ屋があつて、日光にどんよりと白光を放つてゐるブリキの器具を澤山に造つて、店の前に重ねてあるのを見ました時に、やはりそれが私の心を樂しましたといふよりは、むしろ寒い色彩に乏しい單調な生活が其處にもくりかへされてゐるとしか思はれなかつたのです。

かういふ賑かな雜沓した通りから、少し裏通に入ると静かな全く忘れられたやうな土地のあることを見出すものです。私はどうしてこのあたりに住んでゐる人は日を送つてゐるだらうかと考へるたびに何となく其等の人々の生活には疲労と倦怠とがつき纏つてゐるやうに感じられた。何となれば急流の中心から

479
僅かに外れた岸の方で何も知らぬ顔で眠つた有様はどんよりと水の動かない處のやうに思はれたからでありました。しかし私は此の裏通りに自分の慰藉を見出したのです。此の町の左側に仕立屋があつて、前に高い建物もなく日當りのいい家でありました。私は其の家の前を通るたびに上下に開け閉めの出来る横障子が半分ばかり開いてゐる店頭を眺めた。其れは光線を手許に入れるために開けたのであらうが、天氣の好い雲のない日には其處から大空に漲つてゐる明るい太陽の光線が射し込んで其處に坐つてゐる娘の赤い帯に燃え移る。少女の顔は見えないが優しな腰から下の方だけが見えて、上の方の半分は障子に遮られて見えなかつた。まだ幾人か奥の方に坐つてゐる少女はあつたらうけれど其等の姿は見えなかつた。たゞ最も此方の端に坐つてゐる少女の躰は繪のやうに浮き出て見えた。其の此方の端に坐つてゐた娘が紅い帯をしめてゐたのです。而して其の少女は白い足袋を穿いて足を行儀よく重ねてゐました。明るい日の光

りは恣に鮮かに其の帯に吸ひ付いてゐるのを見た時、私は着物の下の柔かな臍に生温かな血潮が響きを打つてめぐつてゐるのを覺えて、たゞ何となく夢見るやうなうつとりとした感じがして、造物主を讚美し、自分の胸の怪しく鼓動するのを知つたのでありました。

路い白

もう彼方の高い時計臺を見上げると、黒い針が十時を過ぎてゐます。日の光りは兩側の瓦屋根の上にまさに直下せんとしてゐます。都會に住む人々は遠い静かな田舎に住む人の思ひも及ばぬやうな慌しい心で、もはやあらゆる音と叫びと響きの渦中に息苦しいうめきをあげて活動をしてゐる。朝は既に遠く地上を離れて、空の色は晝を思はせるやうにうるんで來た。私は會社に行つたならば社長が青白い神経質な顔をして、今日も遅刻して來た私の顔を見るだらうと、其の眼を想像しながら歩くこと不快な感じがしたのであります。いつ自分はこの會社に行かなくなるであらうと考へながら、窮りない空を仰いで、すべての生

物の故郷であつた自由に憧れたのであります。

四

突然、寒い北風が出て家根の上を走つてゐる電線が鳴つてゐる。町の中を男も女も急ぎ足で下に氣を取られながら歩いてゐる。殊に女は着物の前を押へて歩いてゐます。私は坂の下の古本屋の店頭に腰をかけて外を眺めてゐるうちに日がだん／＼暮れかゝつて、うす暗くなつて來ました。あれ等の人々はどんなことを考へながら歩いてゐるだらうと思つて店頭を通る人に氣を付けて見てゐると、たま／＼女の裾が風に吹かれて無残に白い脛が現はれたり、紅い巾が足先に絡んで寒さうに見えるのが何となく痛々しく見えるうちにも熱い感情をそゝるのです。かういふ有様を常に此の店にゐて見てゐる顔色の青い少年や番頭のSなどはこの刺激的な色彩についてどんな空想を描きながら見てゐるだら

路い白

う……と私は思つて振り向いて少年の顔を眺めました。少年の顔には別に押へ
難いといふ程の感情の興奮も見えなかつた。其の冷かな沈んだ青い顔は夕暮方
の空氣の中に浮いて見えた。而して眼は下の紙の上に落ちて頻りに色鉛筆で何
か描いてゐるのでありました。私は少年の傍に身を寄せて、肩端から覗いて見
ますと其れは可憐な少女の姿でありました。

482

『誰かモデルがあつたのかね……』と私は聞きながら紙の上に描かれた女の
顔を見守りました。まだ其の描かれた女は何んでも年の行かない少女の顔であ
つた。頭髮の亂れた、唇の色の紅い、而して頬のあたりは少し濃過ぎはせぬか
と思ふ程に紫が使つてあつた。其れは多分沈痛な愁しみを見せたと思はれるや
うな感じがした。私は其の繪が果してこの世界に生きてゐる少女に似てゐるか
否かを知らなかつたけれど、この少年の精神がこの畫に宿つてゐればそれでこ
の畫は生きてゐるといつていゝやうな氣がしたので、こんな少女もこの世界に

路い白

483

生存してゐるといふことを知つたのでありました。私は其處に可憐な少女が昵
と此方を見つめてゐるのを懐しいと思つて眺めてゐた。

『これはほんたうに誰れの顔だね』と私は二たび軽く言つて笑つたのでした。
すると少年は淋しい笑みを片頬にうかべて何となく羞づるやうな様子が見えた
……けれどやはり指頭で色鉛筆を動かして少女の髪などを濃く書き加へてゐ
ました。私は黙つて見てゐるうちに、あまりいつたいに書き過ぎるといふやう
に感せられました。しかし少年にとつては思ひきり印象をはつきりと出さうと
したに違ひない。彼は一筋の後髪が頬にかゝつてゐるやうに少女の頬を掠めて
線を引いた。

此時街頭を風は吹いて、何處からともなく落葉が街の中に飛んで來た。而し
て向ひ筋の軒には青い瓦斯が點り始めた。この燈火を掠めて一片二片黒く落葉
の散つてゐるのが見られました。

路い白

私は其の後もたび／＼この少年が繪を描いてゐるのを見た。しかし私はこの店に立寄つてもあまり話をしたことがなかつた。たゞ何といふことはなしに少年は陰氣であつた。而して私は少年の元氣のない上に青い顔をして、あまり物を言ひたさうでないのを見て彼は病身であるまいかと思つて眺めてゐたのです。或日私はやはり會社から歸りにこの坂の下の古本屋に立寄つた。其時はちやうど少年がゐなくて、店には一人Sがゐるばかりでありました。私はSから一つの話の聞ききました。もとより少年の身の上についての話で――

少年には一人の妹があつた。少年は十七で妹はまだ十六であつた。家はXの町にあつて其處で母と妹は二人で貧しい生活をしてゐた。母と娘は家の座敷をY私立大學校の學生に貸して、其の學生の世話をして僅かに貧しい生活の幾分かにあてゝゐたのであつた。少年は稀にしか自分の家に歸らない。而して稀に家に歸つた時に妹や母の顔を見るので、妹もまた兄の顔を見るのを楽しみにし

てゐた。其の時でなければ兄と妹は互に顔を見ることがなかつたのである。

少年の奉公に来てゐるこの古本屋のある町と母と妹の住んでゐるXの町とは可なり隔つてゐる。或日の晩方少年は店頭に瓦斯の點つた下に妹の姿が悄然として佇んでゐるのを見た。少年は不思議に思つた。是迄一度も來なかつた妹がしかも今頃になつて自分を訪ねて來るといふことが考へられなかつたからである。少年は胸に不安を抱きながら外に出た。すると妹は淋しさうに兄の顔を見て微笑んだ。而してこの明るい燈火の下を避けて、うす暗い蔭に隠れようとしたので、兄は黙つて妹の行く方について隣家の前に行つた。其の家は卸商人であつて夜になると半分戸を閉めて前がそんなに明るくなかつたのであつた。兄は妹と顔を見合はしてから、

『今時分どうして來たんだ。何か家に變つたことがあつたのか？』と心の慌しく騒ぐのを感じながら妹に聞いたのである。

妹は急にうなだれてしまつて、いつまでも黙つてゐた。兄は、たゞ妹が自分に遇ひに來たのだと思つたので、

『なんにも、別に用事はないのか？』と優しく言つたのである。妹はたゞ黙つてうなづいたのであつた。兄は此時始めて妹は思つたよりも子供であると感じたと同時に優しい心のあるのを嬉しく思つた。

『もう遅くなるといけないから早く歸れよ。』と兄は言つて、此方の店頭に來た。而して妹を振向いて見ると、妹はまだ何やら言ひたさうに其處に立つて、此方を見てゐる顔が白く、何處やら名残惜しさうな姿であつた。

其の後またび／＼妹は店頭に來たのである。いつも日暮方のうす暗くなつた時分である。Sには妹が兄に何か相談があつて來るのだらうと思はれた。しかし其のたびに妹は何事も言はずに歸つて行つた。或日兄はたまりかねて妹を叱つた。それからもう妹は來なくなつたのである。

突然、或日妹の自殺した報知が少年の許に達した。少年は慌て、家に歸つた。すると兄に當てた一通の遺書がうす暗い四疊半に血を吐いて倒れてゐる妹の死骸の懷から發見された。少年は戦える指でそれを開いて讀むと顔の色が眞青になつて眼が鋭く光つた。けれど少年の眼からは急に涙も出なかつた。

——それにはかういふ意味のことが書いてあつた。Y學校の學生と母親に隠れて相愛してゐた。たゞ自分は末に夫婦になれるといふことを楽しみにして、其の身を男に委したのである。其のうち自分はいつしか懷妊したことを悟つた。其のことを男に話すと間もなく男は姿を隠してしまつた。母はそんなことゝ知らなかつたから、男が都合があつて何處か近所へ轉宿した位にしか思つてゐなかつた。自分は其日から毎日のやうに當もなく男の行衛を探してゐた。しかし其の男は、この附近には居らぬと見えて、つひ顔を合はすこともなかつた。彼れ是れするうちにもう四月になつたので、自分の目にも分るやうになつた。今更

このことを母には打ち開け悪く、せめては兄にと思つて、たび／＼本屋の前に来たけれどもいつも胸が塞つて打ち話す勇氣も出なくなつて其の儘家に歸つた。こんな姿になつた自分が淺ましく、恥かしい。もう母にも兄にも合はず顔はない。みんな自分が悪かつた。後悔して罪をお詫びするために自殺する。決して先方の男を怨んでゐない……。

Sが私にこのことを話して聞かせたのであります。

私は此時、はじめて古本屋の店頭で少年の日頃色鉛筆で描いてゐた悲しさうな少女の姿は、少年の妹の顔であつたことを知りました。而してこの少年を哀れに思ひました。

私は會社で一日の間單調な仕事をつゞけてゐます。けれど時々仕事の手を休めてペンを下に置いて何を思ふとなく空想に耽ることがあります。私の思ひはだん／＼と灰色の廣い廣い果しのない野原を歩いて行つて、しばらく茫として

ゐますがふと現在に立返つて來るとこの別に望みもなく、楽しみもなくまた感激もない自分の其の日其の日の生活が、しまひにどういふやうになつて行くかと感ふことがあります。其時ふと遠くから雲を貫いて野原の上に射し込んで來た太陽の光りのやうに、明るく華かな色彩がぼうつと浮んだ——赤い帯——が目に見えるとまた會社から歸りにもあの仕立屋の前を通つたら赤い帯が見られるのであらうかと思ふと何となしに胸が躍るのであります。私はあの少女の顔を見もしないのに、またあの少女とどうすることも出来ないのに赤い帯を見るとき幻のやうに愛嬌のある色の白い少女の顔が微笑んで私の眼に映じて來た。私と其の少女とは何等か離れることの出来ない因縁があるやうに思はれたのであります。私は赤い帯を見てまだ見ぬ戀に一種の憧がれがあつたのであります。

私は常に社長の瘦せた頬や、鋭い眼の光りを見る時には、其の人の趣味の乏

しい淋しい生活が目に見えて来て、私の心持は氷で冷されるやうに感じました。而してこの人の下に使はれてゐなければならぬ自分の生活に對する不安と身の行末とを悲觀せずにはゐられませんのでありました。私はそんな時に彼の淋しいうす暗い古本屋の店頭で、死んだ妹の顔を描いてゐる少年の姿を思ひ浮べますと哀れなうちに、何となく一種の悲壯な藝術的な氣分を感じるのでありました。人生のさまざまの運命を、都會が産んだ怖しい罪惡を、そして疲れた者の上に降る死といふ最終の安息を、意味深い自然の掟のやうに感じて深く瞑想させられたのであります。

私は會社にゐる時、また道を歩いてゐる時家にゐる時、たび／＼赤い帯と少年とを空想の題目に捕へていろ／＼と思ひをめぐらしながら、それを楽しんでゐました。そのうちにいつしか私は少年の妹と赤い帯の顔を知らない少女とを結び付けて——戀——死——赤い帯——と考へてゐたこともあります。電車の窓に

夕日が當つて、窓から見ると都會のあらゆる建物の上に赤い血潮のやうな光りが流れてゐる。それを私はなやましい思ひで眺めながら、このなやましい物質文明の轟きの聞える自然の裡に、おつとりした白い娘の頬と——赤い帯——白い足袋——などを空想の眼に描いて、このまだ世の罪を知らぬ少女も嫁に行くことがあるであらうなごと思つたのであります。

私は毎日かうして同じい道を、同じい色の空想に耽つて會社に通つてゐました。而してたえず何等か自分に慰藉を與へるやうなものはないかと心のうちで探してゐました。けれど途中で古本屋に立寄つて書物棚の前に立つこと、少年の青い顔を見ること、停車場から電車に乗ること、果物店の角を通るレールの白光りのする輝きと、果物の新鮮な色彩と、仕立屋の前を通つて腰から下の出てる少女の赤い帯を見ること以外にはいつまでたつても楽しみは見當らなかつた。其の中にも少年の青い顔と赤い帯が最も自分に深い關係があるや

うに思はれた。赤い帯は私の隠れた性慾をそゝり、少年の物思ひに沈んだ青白い顔は私の隠れた藝術的感興を呼び起したのであります。

冬の初めであつた。古本屋のSは胸の病氣にかゝつて温かな南の方へと轉地してしまつた。私は毎日のやうにこの古本屋に立寄つても、話をするものにならなかつた。而してSの病氣は私に怖い覺醒を與へた。田舎から出て來た健全な男が、毎日あゝして店頭に坐つて道を通る人々を眺めてゐるうちに、いつしか知らず躰を病氣に犯されて胸が腐れて行つた………かう考へた時に私は都會の生活の危険を思つた。毎日のやうに塵埃に濁つた空氣を呼吸してゐる自分の躰もいつしか衰へ、滅びるのでよいかといふことを考へない譯には行かなかつたのであります。Sがゐなくなつてから、古本屋の店頭にはたえず主人が坐つてゐました。眼の落ち窪んだ瘦せた顔をして往來を通る人々を見つめてゐました。主人には少年もSもなかつた。たゞ景氣と不景氣といふことだけ

を考へてゐるやうな險しい冷かな光りが眼の中にあつた。少年はやはり青い顔をしてゐる。私にはもし醫者が見たなら、Sよりもこの少年が先に轉地せなければならぬといふだらうといふやうな氣がいたしました。少年はやはり色鉛筆で妹の顔を書いたり、車を書いたり、建物などを書いたりしてゐました。私はいつ少年が醫者の家へ行くやうになるだらうかと考へてゐました。

ある日のこと、冬の日光が會社の南向きの硝子窓に當つてゐた。みんなが晝飯を食べて雑談をしてゐた時分に、給仕が入つて來て、

『今果物屋の前で、この横町の仕立屋に通つてゐる娘が電車に轢かれた。』と言つて聞かせました。これを聞いた時に私の胸は何んだか怪しく轟いて、騒ぎ始めた波は容易に意志の力で穩かに出來ぬやうに感じました。あの坂を上つて行くとき常には白光りのしてゐるレールの曲り角に赤い夕陽の反射してゐる光景や、果物屋の光景が一時に眼に映ると同時に、赤い帯が眼に映つて、もしも今

電車に轢かれた仕立屋に通つてゐる娘といふのは赤い帯の娘でなかつたかと思ふと益々私の胸は騒いだのでありました。

『オイ、其の娘さんは死んだのかね。』と私は慌て給仕に聞いたのであります。すると十三四になる給仕は此方に色白の圓い顔を向けて、

『片脚を轢き切られたとか言ひますが、死にやしないんでせう……』とさも他人の身の上のこのこのやうに言つて別に興味もないといふやうな返事をいたしました。私は何となく氣にかゝつたけれど、しかし其れ以上聞いて見ることも出来なかつたので、また仲間の者に對しても自分の胸に思つてゐるやうなことは話して見る氣にはなれなかつたのであります。

私は其日歸る時刻が來た時、急いで會社を出ました。而して怖しい事實が瞬間に於て發見されるやうな不安の念に驅られながら、仕立屋の前に来て店を覗きました。果して自分の懸念が事實となつて示された如く赤い帯が見えなかつ

たのであります。けれど私はまたこゝも思ひました。赤い帯の娘はちやうど今日は來なかつたのだらう……明日の朝通れば分ることだと無理に怖しい事實を心のうちで打消して其の家の前を通り越してしまひました。而して例の果物屋の前にかゝつて、厭なものを見るやうな氣持で眼を坂の上に走つてゐる白光りのするレールの上に注ぎました。私は心のうちで黒く流れてゐる血の痕を見ようと期しながらそのあたりの地の上を見廻はしました。しかし何處も一樣に白く乾いてゐて人々が間斷なく歩いてゐて、何處で娘が轢れたのか血の流れた跡も見えなかつたのであります。——恐らく娘が轢れた時は電車が停留したに相違ない。幾臺もなく來かゝつた電車は停留して、人々は其の轢れて倒れてゐる娘の周圍に黒く集つた。血がレールの上にも流れてゐた。黒い服を着た電車に關係のある人々が娘の近傍の醫者に擔ぎ込まれて行つた後で水を流して其處に溜つてゐる血を洗つた。其の時には地上は濡れてゐたのである。しかし

う其の次の瞬間に來かゝつた人々は其處で人が轢れたといふことを知らなかつた。而して其の水の上を跨ぐやうにして歩いて過ぎた。次の瞬間には人々の下駄について來た埃や、地上を掠めて通る風や、うすい太陽の光りで乾いて一様に地の上が白くなつた。而して其日の正午頃になつて痛ましい事件は跡形もなく此の世界から忘れられて行くのであつた。其の次の瞬間には人々はまた新しい出來事を語り合つてゐるのであつた——私はこんなことも思つたのでありました。

しかし明る日の朝も私は仕立屋の前を通つた時に赤い帯を見なかつたのであります。其の明る日も私は心のうちで見る事が出来るかと思つて通りました。しかし赤い帯と、白い足袋とは見えなかつた。たゞ僅かに奥の方に坐つてゐる他の人の衣物の端が見えたのであります。遂に私はもう赤い帯は見られないものだと思つてしまひました。あの娘は轢かれたのか？それとも轢かれたのは他の娘であつたか？而してこの赤い帯の娘は病氣にかゝつて休んでゐるの

か？………それとも嫁に行くので來なくなつたのか？………といろ／＼なことを考へました。

其後もやはり寒い冬の空に、赤い入日が果物屋の硝子戸に弱い燐の火のやうに燃えてゐます。また店頭に置かれた果物の上にもその黄色な光りを落してゐます。坂の上に走つて行くレールの上には夕日は血のやうな赤味を帯んで反射をしてゐます。また遠く連なつてゐる坂の上の電信柱が青い海のやうな色をした空の彼方に没してゐる。私はそんな景色を其後も會社から歸りに見たのであります。しかし其等の景色を見る時にも、もはや前のやうに憧がれを抱いて見るよりは、いつまでこの會社に通つて、こんな景色を見る事が出来るだらうかと淋しく思ひました。何となればこの會社に來なくなれば、このあたりの夕暮の景色も見る機會は殆んどないといつてい、と思はれたからであります。

つひに私は彼の鐵橋の上に立つて、欄干に凭れながら下の停車場を見たり、

黒ずんだ水の上を往來してゐる船の姿に心を止めながら、彼の何の仕事も持たずにくゞに來てかうして空想に耽つて日を送る人々のやうに自分の明日からの生活を考へなければならぬ日が來たのであります。私はふとした機會から、平常はあまり物も言はなかつた社長と議論をしました。其時は、私は意識せなかつたけれどこの單調な生活に對する不平と眼に見えない権力の壓迫に對する反抗とが一時に私の胸の裡に漲つたのであります。私はもう明日からあの青色をした痩せた社長の顔を見ないでいゝと思ひましたけれど、殆んど毎日のやうにこの鐵橋を往來したことを思ふとこのあたりの景色にしばらく別れるのが何となく悲しかつたのであります。鐵橋の上には知らぬ人々が私とは無關係に歩いて行きます。永遠にかうして互に相知らぬ人々がこの鐵橋の上を往來してゐるに違ひない。しかしもう二たび赤い帯を見ることが出來なくなつてからさまで私は會社をやめても後に心を惹かれるやうなものもなかつたのであります。

した。

もし恐らく赤い帯を毎日見ることが出來たなら、私は社長と喧嘩をしなかつたかも知れなかつた。娘の赤い帯は、私の毎日歩く白い路の上に浮き出た一つの赤い喜びでありました。

五

私は會社に行かなくなつてから、しばらく古本屋にも行かなくなりました。従つてあの白い長い石垣を毎日のやうに電車窓から覗いて見て、頭から押へ付けられるやうに重苦しい感じを経験することもいらなくなりました。すべてについて私の生活は變つたのであります。而して私は自分で曾て豫期しなかつたやうな全く知らなかつた未來といふものを其の日、其の日に経験したのであります。

いまでもあのうす暗い古本屋の片隅で、あの顔色の青い少年は色鉛筆で、時々死んだ妹の顔を思ひ出して描いてゐるであらうと思ひます。………而してこの空氣が煤煙と塵埃で濁つた都會の生活は、あの躰の弱さうな少年を自由に廣い野原に放して充分に新鮮な空氣を吸ふことも得させないで、あゝして毎日のやうに店頭を通る人々を眺めて、空しく車の音を聞いて、茫然として製造場から起る遠くの汽笛にも時々心を止めさせながら、手足の運動もせずに物思ひに沈ましてゐることです。而してだんく少年の神経が過敏になつて、躰が衰へて、Sと同じいやうな病氣にかゝつて乾いた自分の足許に血を吐いて眼が昏んで來て倒れるのでせう………けれどせめても死んだ妹の顔が、ぼんやりと煙の裡に浮んで見えたり、また空想の灰色の霧のうちに描かれて、少年の單調な物憂い生活をなぐさめてゐるのです。

永遠に………土に水氣の乾いて、色の褪めかゝつた草の葉の上に降りかゝ

る青い月光のあるやうに………。

白痴與附

大正二年三月十日印刷
大正二年三月三十日發行

定價金壹圓拾錢

著者

小川健作

發行者

清水米吉

印刷者

松澤玨三

發行所

東京市牛込區早稻田鶴卷町四四三
文影堂書店

發賣所

東京市神田區南神保町十三番地
有斐閣雜誌店

賣捌所

東京市神田區
東京堂・上田屋

印刷所同勞舍

著作年表

愁人	1907
緑髪	1907
惑星	1909
闇	1910
赤い船(お伽話集)	1910
物言はの顔	1912
少年の笛	1912
管鈍な猫	1912
北國の鴉より	1912
白痴	1913

272
539

終

